

運動に対する深い学びに向かう生徒を育てる保健体育科学学習指導
ー学習の転移を促す思考フローを導く学習過程を通してー

長期派遣研修員 荻田町立新津中学校 教諭 向野 文章

I 主題設定の理由

1 社会の要請・教育の動向から

近年、グローバル化や情報化が進展する社会の中では、多様な主体が速いスピードで相互に影響し合い、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播するなど、先を見通すことがますます難しくなっている。人工知能の急速な進化により、今後10年～20年程度で半数近くの仕事が自動化され65%の子どもたちが、今存在していない職業に就くとの予測もある。このように予測困難な未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である。つまり、変化を前向きに捉え、自ら課題を発見し、創造的な発想や、柔軟な発想など、心を持った人間にしかできない思考を働かせながら合理的な解決に向かうことで、人生や社会をよりよいものにしていけることができると考える。

平成29年7月21日に文部科学省から公示された「中学校学習指導要領解説 総則編」では、生徒に育成を目指す資質・能力を三つの柱として以下のように整理している。

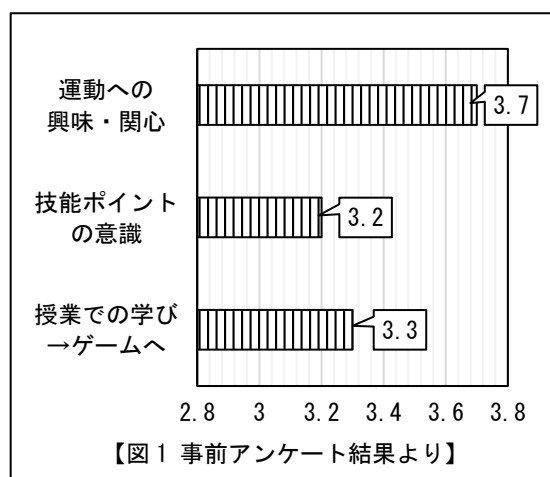
- 知識及び技能が習得されるようにすること。
- 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- 学びに向かう力・人間性等を涵養すること。

また、平成28年12月21日に中央教育審議会から示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以後、答申と言う）では、「学びの成果として、このような資質・能力を身に付けていくためには、学びの過程において子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたりしていることが重要であり、単に知識を記憶する学びにとどまらず、身に付けた資質・能力が様々な課題の対応に生かせることを実感できるような、学びの深まりも重要になる」と示されている。

つまり、生徒に、予測困難な未来を生き抜く資質・能力を身に付けさせるためには、学んだことが人生に活きるということを知り、豊かなスポーツライフの実現を含めた、よりよい人生や社会の実現に向けて学び続ける力を育んでいくことが重要であると考え。これらのことから、運動に対する深い学びに向かう生徒を育てることは、大変意義深いと考える。

2 生徒の実態から

荻田町立新津中学校は全校生徒437名の中規模校である。調査対象である第2学年1・2組の男子生徒に事前アンケートを行ったところ、「運動・スポーツや体育の授業への興味・関心」は3.7(4段階の自己評定尺度法、調査対象学級平均値、以下も同じ)、また「運動をするとき、技能のポイントを意識しているか」という質問に対しては3.2、「練習したことを、ゲーム(試合)で当てはめて使ったり、活かして使ったりしているか」という質問に対しては、3.3という結果が得られた【図1】。これらのことから、調査対象学級の生徒は運動に対して意欲的であ



るが、ポイントを理解して体現できるようにし、他の状況で活用するといった学びの深まりには至っていないことが分かる。

また、調査対象学級の「新体力テスト」（平成29年6月実施）の結果によると、「上体起こし」以外は全国平均を下回っており、体力を総合的に高めていく必要があることが分かった【表1】。

【表1 平成29年度 新津中学校第2学年（学年全体・調査対象学級）と福岡県・全国の新体力テスト平均値の比較】								
種 目	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (点)	20mシャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ハンドボール投げ (m)
調査対象学級	27.96	28.89	43.37	51.2	86.96	7.93	189.23	19.85
学年	29.53	28.72	41.44	50.94	89.42	7.80	192.78	19.68
福岡県	29.26	27.53	43.43	52.53	87.92	7.97	197.25	20.94
全国	29.66	28.09	43.79	53.28	90.29	7.84	196.97	21.32

（新津中学校はH29/6実施、福岡県はH28年度、全国はH27年度データ）

3 自身の指導の反省から

これまで自分自身の授業を振り返ると、授業を通して生徒に身に付けたい力が明確になっておらず、いわゆる「活動あってねらい無し」の授業が多く見られた。運動が得意な生徒は、そのアドバンテージから、何をするにしても前向きに取り組むことが多かったが、運動が苦手な生徒には、運動嫌いを助長し、何も得ることなく人生の中で無益な時間を過ごさせてしまったのではないかと後悔の念が積もる。反省の念を込め、生徒が、ただ体を動かすだけではなく、課題を発見し、課題解決に必要な知識や技能を身に付け、それらを試行錯誤しながら応用し、より習熟していくといった、運動に対する深い学びに向かうことのできる授業づくりを目指し、豊かなスポーツライフの実現へ寄与することができる授業の在り方を追究するため本主題を設定した。

II 主題・副主題について

1 主題の意味

（1）「深い学び」について

身に付けた知識や技能を様々な場面に当てはめたり、試行錯誤したりすることで、知識や技能が結び付き、豊かな思考力・判断力・表現力を身に付ける学びのことである。

溝上慎一氏（2017）は、深い学びについて、「さまざまな知識や経験、考えとの関係の中に位置付けられ構造化されること」と述べている。

答申では、深い学びについて、「各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」ものであり、学びの深まりの鍵となるものが、各教科の特質に応じた『見方・考え方』であり、これらは、「新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものである」と示されている。

これらのことから、深い学びとは、他と結びつかずにすぐ消えてしまうような知識や技能ではなく、自分が持っている知識や技能を新たな知識や技能と結び付け、人生に活かしたり、より豊かな思考力・判断力・表現力を身に付けたりするような学びであると捉えた。

(2)「運動に対する深い学び」について

運動の行い方を理解し、運動技能を高め、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高め、運動を継続しようとする態度を身に付けることである。

平成29年3月に公示された中学校学習指導要領では、保健体育科の目標が以下のように示されている。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 各種の運動の特性に応じた技能等及び個人生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かな生活を営む態度を養う。

この三つの資質・能力を、深い学びの視点で身に付けていくことが重要であると考え。

つまり、知識及び技能に関しては、運動独自の行い方を理解しながら、運動の基本となる技能を身に付け、それらを結び付けながら、生きて働くものにするということであり、本研究においては、「運動の行い方を理解し、運動技能を高めること」「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めること」と捉えた。

思考力・判断力・表現力等に関しては、課題を設定し、課題解決に向けて練習したり、振り返ったりする過程において、思考力・判断力・表現力を養い、豊かなものにするということであり、答申では、思考・判断・表現の過程の一つに、「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」があると示されている。このことから、身に付けた知識や技能を、類似の課題解決や新たな課題解決において適応させたり、活かしたりすることで発想を広げることが効果的であると考え、本研究においては、これらのことを「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めること」と捉えた。

学びに向かう力・人間性等に関しては、運動に親しみ、学習を一時的なものに終わらせず、学んだことを次の学習に活かし、運動を継続しようとする態度を身に付け、人生や社会に、どのように役立てるのかということが重要であり、本研究においては、「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めること」「運動を継続しようとする態度を身に付けること」と捉えた。

2 副主題の意味

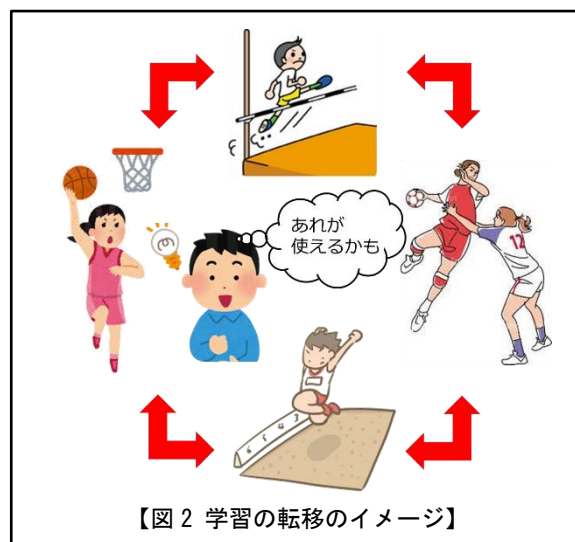
(1)「学習の転移」について

一度獲得した知識や技能、それを身に付けるためのプロセスを、類似の運動場面などの状況においても課題解決等に使用できることである。

秋田喜代美氏(2010)は、「転移可能な知識となるよう学習するためには、学習時に表層的な情報の記憶だけではなく、より深く意味を理解して学ぶこと、学んだ知識が断片的な知識の暗記だけではなく、学習者が持っている既有知識と一貫性をもって関連付けられ精緻に統合されていることが必要である」と述べている。

また、答申では、技能について、「一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくということが重要である」と示されている。

つまり、形だけの理解や個別の技能の習得に留まらず、内容を理解し、学んだことを適応したり、活かしたりする中で転移可能なものに生成されるということである。本研究においては体育分野での単元内、領域内、領域外における知識や類似の動きへの変換、学び方に関することについての転移が期待できると考えた【図2】。



【図2 学習の転移のイメージ】

(2)「学習の転移を促す思考フローを導く学習過程」について

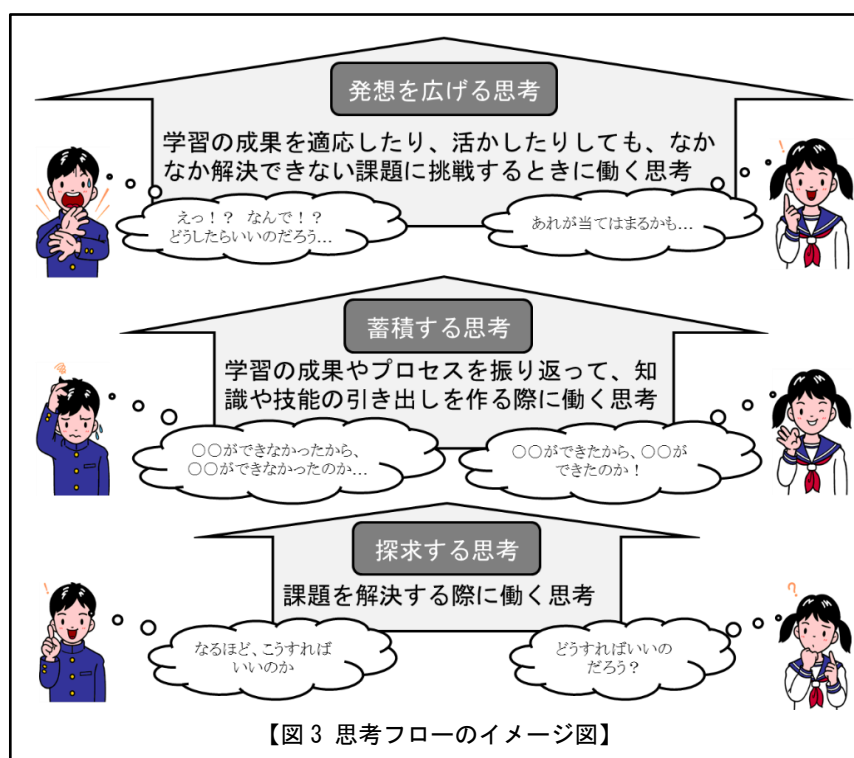
第一次で課題を設定する活動、第二次で「探求する思考」を導く「課題を解決する活動」、「蓄積する思考」を導く「振り返る活動」、「発想を広げる思考」を導く「発展課題に挑戦する活動」、第三次で、学習の成果の全てを発揮する活動を位置付けた学習過程のことである。

課題を設定する活動とは、第一次で生徒の実態に
 応じて、単元を通して到達
 すべき課題を元に自分や
 仲間の課題を設定する活動
 である。スキルテストや試
 しのゲームを行い、生徒は
 運動の特性を知り、自分や
 仲間の課題を見付けること
 で、単元を通して身に付け
 たい力、なりたい自分の姿
 を思い描くことができると
 考える。

「課題を解決する活動」
 とは、第二次前半で、基本
 的な動きを習得する練習や
 フィードバック等修正練習
 を行うことであり、この時
 に「探求する思考」が働く

こととなる。この「探求する思考」とは、設定した課題を解決する際に働かせる考えのことである。生徒は課題解決に向かって練習したり、修正したりしながら、運動の特性を理解したり、効果的な練習の仕方を試行錯誤したりする。これにより、運動の行い方を理解し、運動技能を高めていくことができると考える。

「振り返る活動」とは、第二次後半で学習の成果を振り返ることであり、この時に「蓄積する思考」が働くこととなる。この「蓄積する思考」とは、学習の成果やプロセスを振り返り、知識や技能の引き出しを作る際に働かせる考えのことである。生徒は、学習の成果を認識し、技能習



【図3 思考フローのイメージ図】

得のためのプロセスやポイントを確認することで、知識や技能の引き出しを作ることができる
と考える。

「発展課題に挑戦する活動」とは、第二次後半で教師による発展課題の設定を行い、身に付けた知識や技能を活かして、新たな課題を解決する活動であり、この時に「発想を広げる思考」が働くこととなる。この「発想を広げる思考」とは、身に付けた知識や技能を適応したり、活かしたりして試行錯誤しながら新たな課題に挑戦することで、知識や技能の引き出しを組み合わせる際に働かせる考えのことである。生徒は今ある知識や技能を引き出したり、組み合わせたり、寄せ集めたりしながら、新たな課題に挑戦する。これにより身に付けたことを適応したり、活かしたりすることで、一度獲得した知識や、それを身に付けるためのプロセスを、類似の運動場面などの状況においても課題解決等に使用できる力が高まっていくと考える。

「学習の転移を促す思考フロー」とは、第二次において、「課題を解決する活動」、「振り返る活動」、「発展課題に挑戦する活動」を位置付けたことにより導かれた、「探求する思考」「蓄積する思考」「発想を広げる思考」という思考の流れのことである【図3】。この「学習の転移を促す思考フロー」により関連付けられたり、統合されたりした知識や技能が、体育分野での単元内、領域内、領域外における知識や類似の動きへの変換、学び方に関することについて、転移を起こす可能性があると考えられる。

学習の成果の全てを発揮する活動とは、第三次で、これまで身に付けた知識や技能の全てを発揮する活動である。試合やリーグ戦、競技会や発表会、スキルテストや評価活動を通じて身に付けた知識や技能を実感し、運動が楽しい、これからも運動に挑戦したいなど、運動を継続しようとする態度を身に付けることができると考える。

【表2 学習の転移を促す思考フローを導く学習過程モデル】				
	第一次	第二次(前半)	第二次(後半)	第三次
ねらい	自他の課題を設定する	運動の行い方を理解し、運動技能を高める	身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高める	運動を継続しようとする態度を身に付ける
具体的な活動 【働かせる思考】	課題を設定する活動 ・スキルテスト ・試しのゲーム ・VTRの視聴	課題を解決する活動 ・基本的な動きの習得のための練習 ・フィードバック等修正練習 ・自己評価、相互評価 【探求する思考】	振り返る活動 ・学習の成果を振り返る活動 ・自己評価 【蓄積する思考】 発展課題に挑戦する活動 ・新たな課題を解決する活動 ・自己評価、相互評価 【発想を広げる思考】	学習の成果の全てを発揮する活動 ・競技会 ・発表会 ・リーグ戦 ・スキルテスト ・自己評価、相互評価
具体的な手立て	・コレクトシート ・インクルーシブ教育の視点	・コレクトシート ・インクルーシブ教育の視点 ・エンドレスモニター	・コレクトシート ・発展課題の設定 ・インクルーシブ教育の視点	・コレクトシート ・インクルーシブ教育の視点

(3) 具体的な手立てについて

① 発展課題の設定

第二次後半に設定した「発展課題に挑戦する活動」において、学習した知識や技能を、引き出したり、組み合わせたり、寄せ集めたりしながら、「発想を広げる思考」を働かせ、第二次前半までに学習した知識や技能を適応したり、活かしたりしながら解決に向かうことができるような、発

③ インクルーシブ教育の視点

全ての生徒が学習活動によりよく参加し、学習内容をよりよく理解できるように、全ての活動において、技能レベルが均等になるようなグルーピングの工夫を行う。本実践においては、バレーボールではスキルテストの結果を数値化し、技能レベルが均一になるようにグループ編成を行う。柔道では、体格・体力が均一になるように（新体力テストの結果、授業での様子から）グループ編成を行う。

④ エンドレスモニター

模範となる動きの動画を繰り返し再生するモニターのことである。主に第二次前半に設定した「課題を解決する活動」において、基本的な技能の習得やフィードバック等修正練習において用いる。生徒は練習中いつでもモニターを見て、見本となる動きを確認し、効果的にフィードバックをすることができる。本実践は、バレーボールでは、パス、スパイク、サーブ、柔道では袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としのモデルとなる動画をモニターで繰り返し再生する。

Ⅲ 研究の目標

学習の転移を促す思考フローを導く学習過程を通して、運動に対する深い学びに向かう生徒を育てる保健体育科学習指導の在り方を究明する。

Ⅳ 研究の仮説

保健体育科の学習指導において、学習の転移を促す思考フローを導く学習過程を設定すれば、生徒は、運動の行い方を理解し、運動技能を高め、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高め、運動を継続しようとする態度を身に付けることができるので、運動に対する深い学びに向かう生徒を育てることができるであろう。

Ⅴ 研究の具体的構想

1 仮説検証の方途

(1) 対象

荏田町立新津中学校 第2学年1・2組 男子 32名

(2) 期間

検証授業Ⅰ 平成29年9月25日～11月2日 球技 「バレーボール」

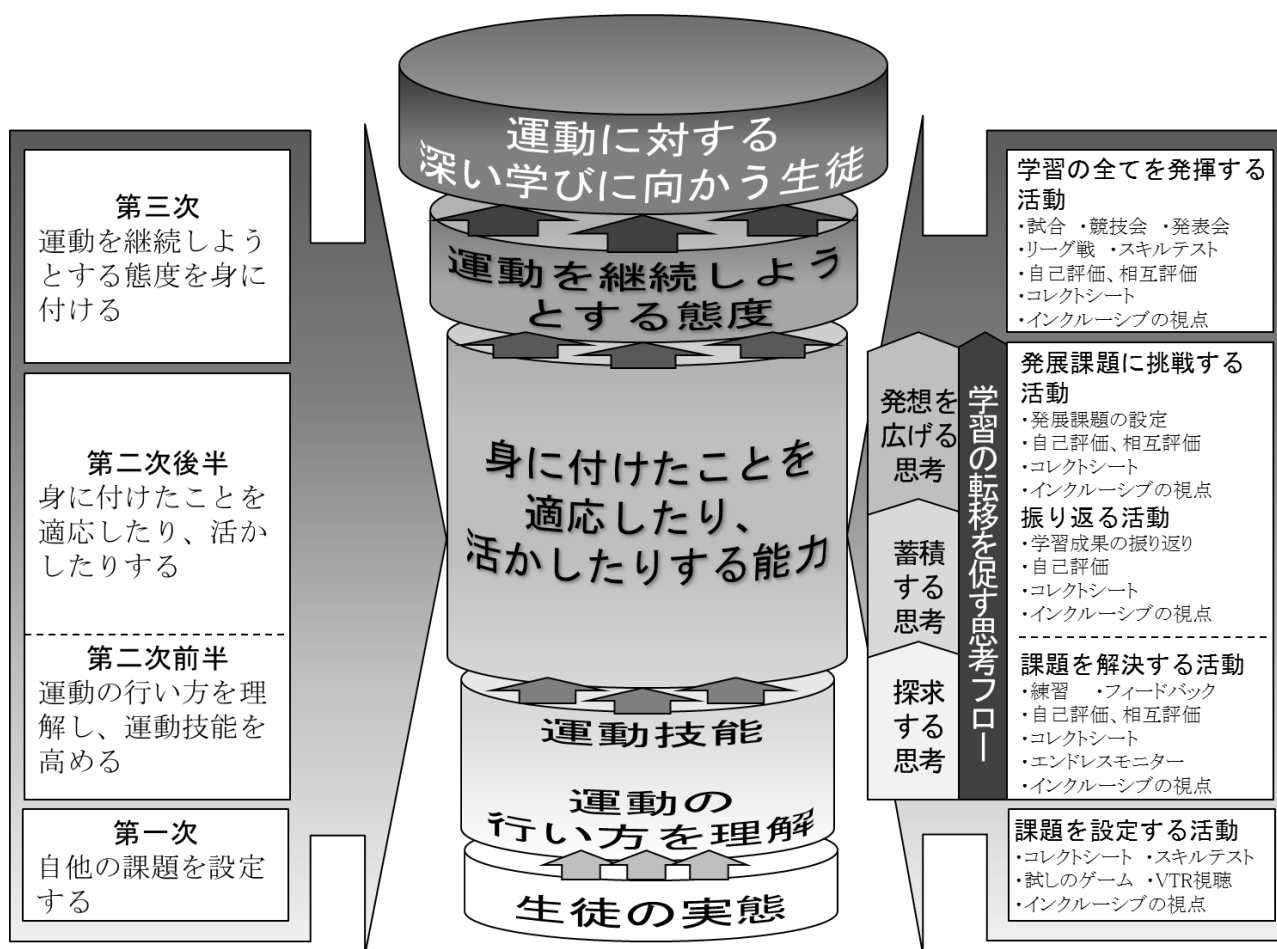
検証授業Ⅱ 平成29年11月6日～12月11日 武道 「柔道」

(3) 内容と方法

検証内容	検証方法	段階	判定基準
検証1 運動の行い方を理解することに有効であったか	「振り返る活動」におけるコレクトシートへの記述	A	各単元における主運動となる技能項目の全てにおいて、技能ポイントの記述が三つ以上ある。
		B	各単元における主運動となる技能項目のほぼ全てにおいて、技能ポイントの記述が三つ以上ある。
		C	A、B以外

検証 2 運動技能を高めることに有効であったか	単元前と単元終了後の技能の変容 (スキルテスト・約束練習・自由練習)	A	単元ごとに、「結果と考察」に明記する。
		B	
		C	
検証 3 身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったか	「発展課題に挑戦する活動」におけるコレクトシートへの記述	A	単元ごとに、「結果と考察」に明記する。
		B	
		C	
検証 4 運動を継続しようとする態度を身に付けることに有効であったか	単元後のアンケートによる運動の関わりに関する記述	A	運動に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている、かつ、今後の取り組みについての具体的な記述がある。
		B	運動に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている記述がある。
		C	A、B 以外

2 研究構想図



VI 研究の実際と考察

【検証授業Ⅰ】 全 13 時間（平成 29 年 9 月 25 日～11 月 2 日）

1 単元 【E 球技】 ネット型 「バレーボール」

2 目標

- バレーボールのパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングの行い方を理解し、それらの技能を高めることができる。
- 身に付けたバレーボールのパスやスパイクの知識や技能を適応したり、活かしたりすることができる。
- バレーボールを継続しようとする態度を身に付けることができる。

3 単元計画

次	時	学習活動・内容	指導のねらい・手立て
一	2	1 バレーボールの特性を知り、活動計画や学習の進め方を知る。 (1) 学習の計画を知り、学習の準備を行う。 ・学習計画 ・準備運動の内容確認 ・学習の約束確認 (2) バレーボールの必要な技能を知る。 ・男子バレーボール全日本代表の動画視聴 (3) スキルテストを行う。(2 人組) ・直上オーバーハンドパス ・直上アンダーハンドパス (各 30 秒) ・サービス (5 本) ・スパイク (壁当て連続 30 秒) (4) 試しのゲームを行う。 ・チーム編成	自分やチームの課題を設定することができるようにする。 ・学習の見通しを持つことができるように、学習計画を提示する。 ・ゲームの様相をイメージし、バレーボールに必要な技能を理解することができるように、VTR (短時間) を視聴する場を設定する。 ・個人の課題を設定することができるように、スキルテストを行う活動を設定する。 ・チームの力が均等になるように、スキルテストの結果を数値化して、チーム編成を行う。 ・チームの課題を設定することができるように、試しのゲームを行う活動を設定する。
二 (前)	6	2 バレーボールの基本となるボール操作やボールを持たない動きを練習する。 【課題を解決する活動】 (1) ボール操作について教え合い、繰り返しドリル練習を行う。 ・アンダーハンドパス ・オーバーハンドパス ・アンダーハンドサービス ・フローターサービス ・スパイク (オープン、セミ、クイック) (2) ポジショニング・カバーリングの練習を行い、タスクゲームを行う。	パス、サーブ、スパイクなどのボール操作や、ポジショニング・カバーリングなどのボールを持たない動きについて理解し、それらの技能を高めることができるようにする。 ・安定したボール操作を身に付けることができるように、パス、サーブ、スパイクについて教え合いながら、繰り返しドリル練習を行う活動を設定する。 ・見本となる動きに近づけるように、エンドレスモニターを見てフィードバックを行う活動を設定する。 ・ボールを落とさないためのポジショニング・カバーリングを身に付けることができるよう

		・レシーブ隊形 ・レシーブが乱れた時のカバーの動き ・元の位置に戻る動き ・タスクゲーム①（パスのみ） ・タスクゲーム②（スパイクから始まる）	に、レシーブ隊形を考え、タスクゲームを行う活動を設定する。 ・チームで練習する動きを確認し、ポジションや戦術を考えることができるように、作戦タイムを設定する。【探求する思考】
二 (後)	3	3 今までの学習の成果を振り返る。 【振り返る活動】 (1) コレクトシートを見て振り返る。 ・要点をまとめて記述する (2) スキルテストを行う。 ・直上オーバーハンドパス ・直上アンダーハンドパス（各 30 秒） ・サービス（5 本） ・スパイク（壁当て連続 30 秒） 4 ネット付近のボール操作を練習し、設定された新たな課題を解決する。 【発展課題に挑戦する活動】 (1) ブロックの練習を行う。 (2) 条件を変更したタスクゲームを行う。 ・ブロックのフォーメーションからのスパイクから始まるゲーム (3) ゲーム終了後、ミーティングを行う。	身に付けたパス、サーブ、スパイクや、ポジショニング・カバーリングなどを適応したり、活かしたりすることができるようにする。 ・今まで学習してきた、パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングについての知識を深めることができるように、コレクトシートを見て振り返り、要点を記述する活動を設定する。【蓄積する思考】 ・課題解決の状況を確認することができるように、スキルテストを行う活動を設定する。 ・ネット付近でのボール操作を身に付けることができるように、ブロックの練習を行う活動を設定する。 ・今まで学習してきたスパイクを適応したり、活かしたりすることができるように、ブロックを攻略してスパイクを決める活動を設定する。【発想を広げる思考】
三	2	5 リーグ戦を行い、学習の成果の全てを発揮する。 (1) リーグ戦を行う。 (2) スキルテストを行う。 ・直上オーバーハンドパス ・直上アンダーハンドパス（各 30 秒） ・サービス（5 本） ・スパイク（壁当て連続 30 秒） (3) バレーボールの活動全体を振り返り、学習のまとめを行う。	バレーボールを継続しようとする態度を身に付けることができるようにする。 ・バレーボールに関わろうとする態度を身に付けることができるように、リーグ戦を行う活動を設定する。 ・技能の伸びを実感することができるように、スキルテストを行う活動を設定する。 ・学習全体を振り返り、まとめを行うことができるように、感想を記入する活動を設定する。

4 授業の実際

(1) 第一次

【ねらい】 自分やチームの課題を設定することができるようにする。

第一次では、まず、第 1 学年時の学習を振り返り、第 2 学年時のバレーボールの学習の見通しを持つことができるように、単元のオリエンテーションを行った。生徒は、単元終末のリーグ戦に興味を示し、練習してうまくなりたいという意欲を表す姿が見られた。

次に、理想とするゲームのモデルをイメージし、バレーボールに必要な技能を理解することができるように、日本代表による試合の VTR を視聴する場を設定した。生徒は、上級者のプレイの迫力に興味を示し、「全日本の選手のようなスパイクを決めてみたい。」などの感想を持ち、学習への意欲を高めることができた。

さらに、バレーボールの学習における、個人の課題を設定することができるように、パス、サーブ、スパイクのスキルテストを行う活動を設定した【資料7】。その際、【資料8】のチェックシートを用いてスキルテストの結果を振り返り、「パスの精度を高める」ことや、「サーブ、スパイクの威力を高める」といった課題を設定することができた【資料9】。

また、チームの中での自分の課題や、チームとしての課題を設定することができるように、試しのゲームを行う活動を設定した。その際、チームについては、スキルテストの結果を数値化し、数値を均等に振り分けて編成を行った。チームの中での自分の



【資料7 スキルテストの様子】

スキルチェックシート①

2年 組 番 名前

アドバイザー: 名前

1. 直上オーバーハンドパス

30 秒間

チェック項目	回	回数
ボールの落下地点に移動しているか	5・4・3・2・1	
指を開いて、膝の前でボールを突いているか	5・4・3・2・1	
ひじの曲げ伸ばしができているか	5・4・3・2・1	
ひざの曲げ伸ばしができているか	5・4・3・2・1	
元の自分の場所に、添えているか	5・4・3・2・1	
オーバーハンドパスの総合評価 (合計)		

アドバイス

2. 直上アンダーハンドパス

30 秒間

チェック項目	回	回数
顔のように、低い姿勢をつくってボールを受けているか	5・4・3・2・1	
ボールの落下地点に移動しているか	5・4・3・2・1	
腕を伸ばし、ひじが伸びているか	5・4・3・2・1	
ひざの曲げ伸ばしができているか	5・4・3・2・1	
元の自分の場所に、添えているか	5・4・3・2・1	
アンダーハンドパスの総合評価 (合計)		

アドバイス

3. 連続壁当てスパイク

30 秒間

チェック項目	回	回数
ボールの落下地点に移動しているか	5・4・3・2・1	
手首のスナップを効かせて打っているか	5・4・3・2・1	
打つ時にひじが伸びているか	5・4・3・2・1	
体の重みで、ボールをどらえているか	5・4・3・2・1	
元の自分の場所に、添えているか	5・4・3・2・1	
スパイクの総合評価 (合計)		

アドバイス

4. サーブ(アンダーハンド・フローター)

5 本中

チェック項目	回	回数
手首の下向きをキープしてボールを打っているか	5・4・3・2・1	
手首をしっかり固定して打っているか	5・4・3・2・1	
打つ手と反対側の足が前に出て手首の姿勢になっているか	5・4・3・2・1	
体の重みで、ボールをどらえているか	5・4・3・2・1	
基礎(アンダー) 腕の振り、ボールの軌道が安定しているか	5・4・3・2・1	
基礎(フローター) ひじが肩の高さまで上がっているか	5・4・3・2・1	
サーブの総合評価 (合計)		

アドバイス

【資料8 スキルテストで使用したチェックシート】

スパイクでもう少し強く打つ。サーブのいらくが弱い。オーバーハンドでもう少し高く上げる

【資料9 個人の課題 生徒の記述例】

課題や、チームとしての課題を設定することができるように、試しのゲームを行う活動を設定した。生徒は【資料10】のように、「仲間のミスをカバーする」「声を掛け合う」などのチーム内での個人の課題、「仲間がとりやすいパスを上げる」などのチームの課題を見出すことができた。

個人の課題	チームの課題
・プレが雑になった ↓ 焦らず 平常バ ・仲間のミスをカバー ・常に声をかけ合う	・もう少し取りやすいパスを上げる ↓ 低いパスなど スパイクを打つ パス(トス)が高すぎる

【資料10 試しのゲームでの課題 記述例】

(2) 第二次前半

【ねらい】パス、サーブ、スパイクなどのボール操作や、ポジショニング・カバーリングなどのボールを持たない動きについて理解し、それらの技能を高めることができるようにする。

①「課題を解決する活動」

第二次前半では、まず、安定したパス、サーブ、スパイクを身に付けることができるように、チームで教え合いながらドリル練習を行う活動を設定した。生徒は【資料 11】や【資料 12】のようにポイントを意識しながら繰り返し練習を行ったり、チームメイトを観察し合ったり、アドバイスをしたりすることで、互いに協力して技能を高めようとしている様子が見られた。その際、生徒が見本となる動きをいつでも確認することができるように、パス、スパイク、サーブのモデルとなる映像を繰り返し再生するエンドレスモニターを使用した。生徒は、待ち時間にモニターを見て動きを確認し、【資料 13】のように動きをイメージしながら何度も練習に向かう姿が見られた。



【資料 13 エンドレスモニターで見本のスパイクをイメージして、練習を行う生徒の様子】

また、パス、スパイク、サーブの技能の定着を図るためにドリル練習の内容を簡素化して、毎時間のウォーミングアップに取り入れた。班でスパイク練習するときに、トスをうまく上げられない生徒が、「パス練習を頑張る」など必要性を感じて練習に取り組む姿が見られた。

最初はうまくできなかった生徒も、日に日に上達していく様子が見られ、授業の感想では、【資料 14】のように「サーブができるようになった」や「パスがうまくできるようになった」等、伸びを実感する生徒の記述も見られた。次に、ポジショニングやカバーリングを身に付けるために、コート半分による 4 対 4 のタスクゲームを通して、ボールに触れた以外の 3 人がボールに対して正対し、パスの方向を予想することを意識付ける活動を設定した。その



【資料 11 パスのドリル練習の様子】



【資料 12 サーブのドリル練習でアドバイスをしている生徒の様子】

フローターサーブが入るようになった！
ひざもたくさん使って、ボールが上手に返せるように
なった！

【資料 14 授業後の生徒の感想】



【資料 15 レシーブ隊形を考えている様子】

際、ボールを落とさないポジショニングについて理解することができるように、作戦ボードを使ってレシーブ隊形を考える活動を設定した【資料 15】。生徒は、作戦ボードを使いながらチームで話し合い、「空いている場所を作らない」ようにするための、チーム内での分担やポジショニングを確認することができた。

さらに、元の位置に戻る動きや、ボールが乱れた時のカバーの動きを見出すために、作戦タイムの時間をとる活動を設定した。【資料 16】のように試行錯誤しながら陣形やポジションについて作戦を考え、次の試合で試してみることを繰り返す姿が見られた。授業後のコレクトシートには【資料 17】のような記述が多く見られ、ポジショニングやカバーリングについては、「空いている場所を作らないこと」、「ボールが乱れた時はカバーをすること」、「相手コートにボールが返ったら、すぐ定位置に戻ること」が必要なことを理解することができた。

このように、「課題を解決する活動」を通して、パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングについて理解し、身に付けることができた。この時、生徒は「探求する思考」を働かせ、うまくいかないことを改善しようと解決策を考えたり、より正確な動きを身に付けようと試行錯誤したりして、課題の解決に取り組むことができた。



【資料 16 作戦タイムの様子】

コートに空きも作らない。
動いた元の位置にもどる。
はじいたボールをカバーする。

【資料 17 ポジショニング・カバーリングのポイントの記述例】

(3) 第二次後半

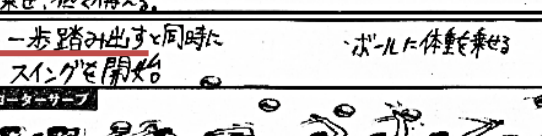
【ねらい】身に付けたパス、サーブ、スパイクや、ポジショニング・カバーリングなどを適応したり、活かしたりすることができるようにする。

①「振り返る活動」

第二次後半では、まず、これまでの学習の成果や技能習得のためのプロセス、それぞれの技能のポイントを確認することができるように、コレクトシートを見て振り返り、要点をまとめて記述する活動を設定した。生徒は【資料 18】のように学習したことを振り返りながら、【資料 19】のようにコレクトシートに、パスをうまく行うためには「落下地点に入ること」、「ボールを引き付けること」、「肘や膝のばねを使うこと」が必要だということ、スパイクをうまく行うためには「助走のタイミング」「踏み切りのリズム」「利き手と逆の手で狙いをつけること」が必要だということなど、それまで学習してきたパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングの技能についてのポイントを整理することで、「なぜ正確なパスができるようになったのか」や「なぜ力強いスパイクが打てるようになったのか」を再確認することができた【資料 20】。



【資料 18 振り返りを記述する生徒の様子】

・おでこの前まで ボールを引き上げける 手の形は 三角形 手首のスタッフで 使う オーバーハンドパス  ・ボールの落下地点 に移動(下半身で動く) ・ひざのバネを 使う	・トスは低く、ボールを そのまま打つイメージ アンダーハンドサーブ  ・後ろ足に体重を 乗せ、他の構える ・体重を前足に移動しながら打つ
・ひざを伸ばして 親指を下げる アンダーハンドパス  ・ボールの落下地点 に移動(下半身で動く) ・腰を落とすボールを 手元に引き寄せる ・ボールの目を見 離さない ・ボールの落下地点 に移動(下半身で動く) ・腰を落とすボールを 手元に引き寄せる ・ボールの目を見 離さない	・一歩踏み出すと同時に スイングを開始 フロッターサーブ  ・ボールに体重を乗せる ・体重を前足に移動しながら打つ ・手か減を減らす
・左手でボールを組む スパイク  ・踏む時のリズムは1. 2. 3 (クニ. クニ) ・ボールを見る ・右手にゆとりとボールのうしろに高く上げ 力を抜く、スタッフで打つ ・ボールを見 直ぐにジャンプ	・コートに空いている場所をつくす ポジショニング ・ボールが相手コートに落ちた時、すぐ元の位置に戻る カバーリング ・レシーバーは打ったボールを、他のプレーヤーがカバーする

【資料 19 「振り返る活動」 コレクトシートの記述例】

レシーブも相手にしっかり返せるポイントがわかった ジャンプするまでのポイントがわかったから強くスパイク を打てるようになった	(ふみ切りのリズムがよくなった)スパイクが打てるようになった。 (スタッフをきかせたから)トスが高く上げられるようになった。
レシーブが最初よりできおきになった (ちゃんとかまえてしたから) サーブが入るようになった (前に出ながら打ったから)	

【資料 20 「振り返る活動」後の生徒の記述例】

生徒はこのように、「振り返る活動」を通して、第二次前半で身に付けたパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングについての理解を深めることができた。この時、生徒は「蓄積する思考」を働かせ、できるようになったことを振り返ったり、どうしてできるようになったのかを自覚したりして、学習してきた成果とプロセスを振り返ることができた。

②「発展課題に挑戦する活動」

身に付けたパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングを適応したり、活かしたりすることができるように「ブロックを攻略してスパイクを決めよう」という「発展課題に挑戦する活動」を設定した。この発展課題はパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングのそれぞれにおいて設定するべきところではあるが、生徒がスパイクへの興味・関心が高いという実態を踏まえるとともに、課題の解決のために、それらの各技能もおのずと必要であることから設定することとした。生徒は今まで学習したスパイクの打ち方やタイミング、オープンとクイックのコンビネーションを考えたり、試したりして課題に取り組むことができた。【資料 21】のように作戦ボードを用いて、マグネット人形を動かしながら、ブロックを攻略するために話し合い、これまで学習したことを想起しながら、新たな課題の解決に向けて試行する姿が見られた。【資料 22】は生徒が考えた作戦の例である。今まで学習したオープン、クイック、セミクイックなどを適応し、クイック攻撃でブ



【資料 21 作戦を考えている様子】

ロックを引き付けて、オープンで攻撃する、A クイックと C クイックを組み合わせ、ブロックを惑わすなどの作戦を考え、チームで協力しながら、【資料 23】のように課題に挑戦する姿が見られた。自分たちが考えた作戦を修正したり、改善したりしながら、話し合い、何度も何度も繰り返し課題に挑戦する姿が印象的であった。

最後に、様々な工夫やアイデアを共有するために、【資料 24】のように考えた作戦の発表を行う活動を設定した。生徒の感想には、他の意見を取り入れて活かそうとする記述が見られた【資料 25】。

生徒はこのように、「発展課題に挑戦する活動」を通して、第二次後半までに身に付けたパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングの知識や技能を当てはめて使ったり、工夫して使ったりすることができた。この時、生徒は「発想を広げる思考」を働かせ、スパイクをどう組み合わせたらブロックをかわせるのかを考えたり、ブロックの動きを予想し、新たなスパイクの組み合わせを考えたりして、課題の挑戦に取り組むことができた。

簡単な解説
Bクイックと見せかけて
Cクイック

この作戦を立てた理由(簡単に)
オープンの場合 敵がおいつけ
けど、Cクイックなら速いし、
敵もう想できないと思う。

【資料 22 生徒が考えた作戦例】



【資料 23 発展課題に挑戦している様子】



【資料 24 意見を全体で共有している様子】

君の Bクイックが Cクイックで相手も
たがますのが素晴らしい。

8班の意見でセッターが
そのまま相手のコートにフェイントを
ふたつ決めるというのが、
「おもしろい」と思いました。

【資料 25 「発展課題に挑戦する活動」後の生徒の感想例】

(4) 第三次

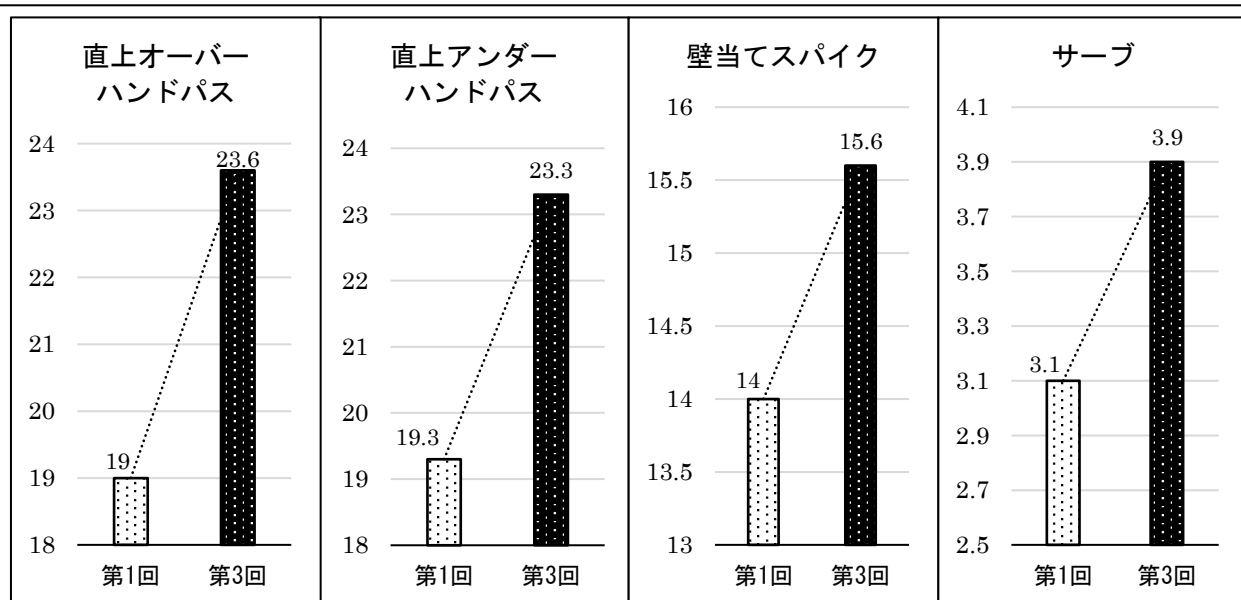
【ねらい】バレーボールを継続しようとする態度を身に付けることができるようにする。

第三次では、まず、学習の成果を発揮できるように、リーグ戦を行う活動を設定した。生徒は、チームでポジションの確認を行い、作戦を考えながら、ゲームを楽しむことができた【資料 26】。特にスパイクが決まった時は大いに喜び、仲間と成果を分かち合う姿がとても印象的であった。

次に、パス、サーブ、スパイクの技能の伸びを見取るために、スキルテストを行う活動を設定した。【図 4】の結果から分かるように、多くの生徒に数値の伸びが見られ、技能の高まりを実感することができた。



【資料 26 リーグ戦の様子】



【図 4 スキルテストの推移】

最後に、バレーボールの学習全体を振り返ることができるように、感想を書く活動を設定した。生徒は、学習の成果を自覚し、「バレーボールは楽しかった」や「バレーボールが好きになった」という感想が多く見られ、「もっとうまくなりたい」や「またやりたい」というような感想も多く見られた【資料 27】。

授業を通してバレーの楽しさや難しさなど学びました。
最初はあまり打てなくて中々困っていたけれど、時間が経つにつれて上手になり、打つ
ようになったので今はとてもバレーは好きです。

日本代表みたいなスパイクなどを打てるようになるために、これからも
授業をがんばって上手になりたいです。

授業ではバレーボールの基本や、ボールを打つときの意識について
学ぶことができ、色々な人の意見も取り入れて活動することができた。
昔、バレーボールは、自分達のコートと相手のコートをボールが飛び
通うだけだと思っていましたが、そうではなく、一球一球に丁寧に
今後では、今回のような授業をこなして、相手に止めさせること
ができない、サーブやアタックを打って活躍したいです。

バレーボールのスパイクには足踏みが大変だと学びました。
バレーボールは楽しいのでまたしたいです。
オーバーハンドパスはできるけど、高く上がらないのでもっと中々で
出来るようになりたいです。

【資料 27 単元終了時の感想 生徒の記述例】

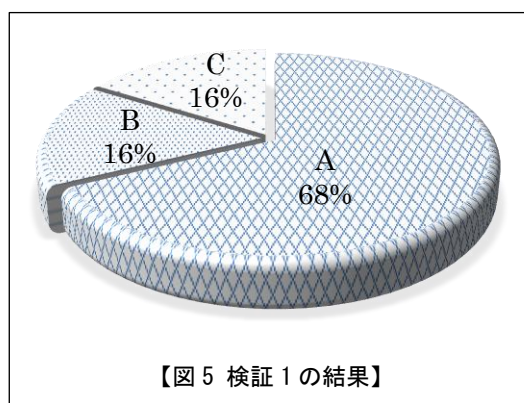
5 結果と考察

(1) 検証1 「バレーボールのパス、サーブ、スパイクなどのボール操作や、ポジショニング・カバーリングなどのボールを持たない動きの行い方を理解することに有効であったか」について

第二次前半に実施した「振り返る活動」の、「技能のポイント」について、【表3】のようにキーワードでまとめて生徒に示した。生徒のコレクトシートの記述内容から【表4】のように「A：パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングの四つの項目について、全ての項目で『キーワード』を三つ以上書き出している。」「B：パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングの四つの項目について三つの項目で『キーワード』を三つ以上書き出している。」という基準で判断した【14頁資料19参照】。

【表3 判断の手掛かりとなる「技能ポイント」キーワード】	
項目	判断の手掛かりとなる「技能ポイント」キーワード
パス	・落下地点 ・引き付ける ・肘、膝のバネ ・スナップ
サーブ	・後ろから前 ・体重移動 ・トスは低く
スパイク	・タイミング ・踏切のリズム ・真上に跳ぶ ・スナップ
ポジショニング・カバーリング	・空いている場所を作らない ・元に位置に戻る ・カバー

【表4 バレーボールの行い方を理解することに有効であったかの判断基準】	
A	パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングについて「技能ポイント」を三つ以上書き出している項目が四つある。
B	パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバーリングについて「技能ポイント」を三つ以上書き出している項目が三つある。
C	A、B 以外



その結果、【図5】のような検証結果になり、A、B 合わせて 84%と高い数値を示した。このことから課題を設定し、解決に向けて繰り返しドリル練習やタスクゲームを行い、改善点を考えたり、意見を共有したりしたことは、ボール操作やボールを持たない動きを理解することに有効であったと考える。このような結果になったのは次の三点が考えられる。一つ目はそれぞれの「技能ポイント」をキーワード化して繰り返し、何度も確認したこと。二つ目は授業の振り返りで、発表する活動を設定したことで意見の全体共有を図れたこと。三つ目は、コレクトシートにまとめて振り返りを行ったことで、知識が蓄積されたことである。

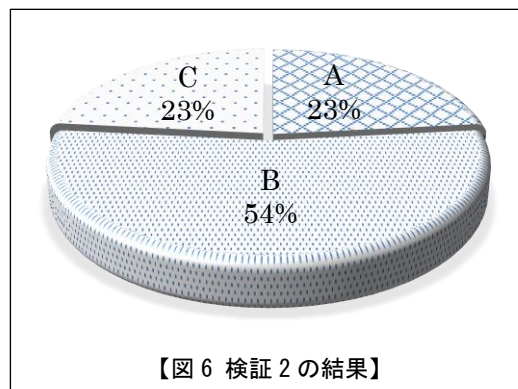
(2) 検証2 「バレーボールの技能を高めることに有効であったか」について

バレーボールの技能の高まりを単元前後に実施した【表5】のスキルテストにおける数値の変容について、【表6】のように「A：オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、連続壁当てスパイク、サーブの四つの項目について、全ての項目で 20%以上の向上が見られる。」「B：オーバーハンドパ

【表5 スキルテストの内容】	
項目	内容
直上オーバーハンドパス	30 秒間の連続回数
直上アンダーハンドパス	30 秒間の連続回数
連続壁当てスパイク	30 秒間の連続回数
サーブ	5 本中の成功本数

ス、アンダーハンドパス、連続壁当てスパイク、サーブの四つの項目について、三つまたは二つの項目において20%以上の向上が見られる。」という基準で判断した。本来ならば、ボールを持たない動きについても検証するべきであるが、発展課題はスパイクを中心とした課題であり、身に付けたパスや様々なスパイクを中心に取り組むと考え、ボール操作の検証で見取ることにした。

【表6 バレーボールの技能を高めることに有効であったかの判断基準】	
A	単元前後を比較し、四つの項目全てにおいて20%以上の向上が見られる。
B	単元前後を比較し、二つ以上の項目において20%以上の向上が見られる。
C	A、B以外

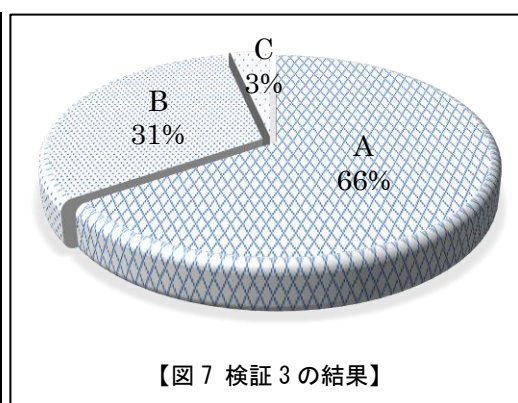


その結果、【図6】のような検証結果になり、A、B合わせて77%であった。このことから課題を設定し、解決に向けて改善点を考えたり、意見を共有したりしながら繰り返しドリル練習やタスクゲームを行ったことは、バレーボールの技能を高めることに対して、概ね有効に働いたと考える。しかし、Cの生徒も23%という割合を示した。このような結果になった理由として考えられるのは、バレーボールに必要な各技能に対してそれぞれ1時間ずつの学習を行ったため、ドリル練習の時間の確保が十分ではなかったことが考えられる。身に付けさせるべき技能を焦点化し、活動内容を精選することが今後の課題である。

(3) 検証3 「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったか」について

発展課題は、身に付けたスパイクやパスの知識や技能を適応したり、活かしたりすることとなる。生徒は、「発展課題に挑戦する活動」の中で、その知識や技能を駆使して取り組むことから検証は、第二次後半に実施した「発展課題に挑戦する活動」の、「技能のポイント」の要点について、【表7】にあるように、生徒のコレクトシートの記述内容から「A: スパイクのタイミングを考慮したコンビネーションの作戦を考えることができおり、かつ、作戦の具体的な理由や根拠を書き出すことができている。」「B: スパイクのタイミングを考慮したコンビネーションの作戦を考えることができている。」という基準で判断した【15頁資料22参照】。

【表7 身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったかの判断基準】	
A	スパイクのタイミングを考慮したコンビネーションの作戦を考えることができおり、かつ、作戦の具体的な理由や根拠を書き出すことができている。
B	スパイクのタイミングを考慮したコンビネーションの作戦を考えることができている。
C	A、B以外

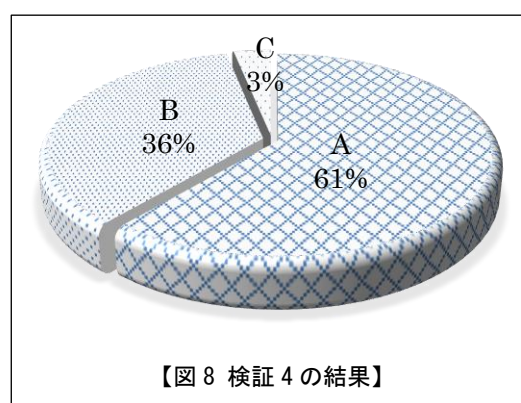


その結果、【図 7】のような検証結果になり、A、B 合わせて 97%と非常に高い数値が得られた。このことから、今まで学習したオープンとクイックを組み合わせたり、レフト側とライト側の攻撃を組み合わせたりして、「ブロックを攻略してスパイクを決めよう」という、発展課題に試行錯誤しながら挑戦したことは、新たな状況で攻撃を工夫することにつながり、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに非常に有効に働いたと考える。このような結果になったのは次の二点が考えられる。一つ目は、発展課題に設定したスパイクが生徒の実態から意欲的に挑戦できるものだったこと。二つ目は、これまでの学習で「ブロックを攻略してスパイクを決めよう」という発展課題に対する様々な解決策の選択肢を、たくさん蓄積することができていたことである。

(4) 検証 4 「バレーボールを継続しようとする態度を身に付けることに有効であったか」について

単元終了時に実施したアンケートにおける、今後のバレーボールとの関わりに関する記述内容を【表 8】のように、「A：バレーボールに取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている、かつ、今後の取り組みについての具体的な記述がある。」「B：バレーボールに取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている記述がある。」という基準で判断した【16 頁資料 27 参照】。

【表 8 バレーボールを継続しようとする態度を身に付けることに有効であったかの判断基準】	
A	バレーボールに取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている、かつ、今後の取り組みについての具体的な記述がある。
B	バレーボールに取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている記述がある。
C	A、B 以外



その結果、【図 8】のような検証結果になり、A、B 合わせて 97%と非常に高い数値が得られた。また、事後アンケートの結果から、「今後もチャンスがあれば、バレーボールを練習したいか」という質問に対して、3.6(4 段階の自己評定尺度法の学級平均値)という結果が得られた。

このことから、バレーボールに必要なパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバリングなどの技能を試行錯誤しながら身に付けようと探求し、振り返って深く理解しながら蓄積し、発展課題に挑戦することで発想を広げ、学んだ全てを発揮するためにリーグ戦を行ったことは、生徒のこれからもバレーボールを継続しようとする態度を身に付けることに非常に有効であったと考える。

6 成果と課題

(1) 検証授業 I の成果

① 「課題を解決する活動」、「振り返る活動」について

パス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバリングを身に付ける活動において、生徒は、技能のポイントを蓄積したコレクトシートを見て再確認し、それぞれのポイントを意識しながら、かつ仲間と教え合いながら練習を行ったことで、身に付け方やコツを理解し、つまづきに対する修正方法を身に付けるなど、行い方を理解することに非常に有効に働いた。

② 「発展課題に挑戦する活動」について

学習したパス、サーブ、スパイク、ポジショニング・カバリングの知識や技能を使って、発展課題「ブロックを攻略して、スパイクを決めよう」に挑戦したことが、「2 人同時にスパイク」「パスの

フェイント」など新たな作戦を考えたり、ゲームを意識して相手のポジショニングをイメージしたりするなどの工夫や発見につながり、身に付けたことを適応したり、活かしたりする力を身に付けることにつながった。

③ 発展課題について

バレーボールに必要な知識や技能を使って、「できそうだけどできない」「できそうになかったけどできた」という達成意欲を触発させるような発展課題を設定したことは、自力解決をしようとして、できるようになるために何度も試行錯誤したりすることにつながり、これからもバレーボールを継続しようとする態度を身に付けることに非常に有効であった。

(2) 検証授業Ⅰの課題

① 発展課題の設定の頻度について

今回はスパイクを中心にした発展課題が、ボール操作に関するものが中心の課題であったため、バランスよく技能の向上をすることができるように多様な発展課題を、生徒の実態に応じて、適切に位置付けていくことが必要であると考えます。生徒の挑戦意欲を大いに引き出すものであり、その他にも生徒の実態に合わせて多様な発展課題を考える必要がある。

② 検証3の見取りについて

検証3における、身に付けた知識や技能を適応したり、活かしたりできたかについて、「作戦を考え出す」ということで判断したが、作戦の有効性がどうであったかまで見取る必要があった。

1 単元 【F 武道】 柔道

2 目標

- 柔道の抑え技や投げ技の行い方を理解し、それらの技能を高めることができる。
- 身に付けた柔道の抑え技や投げ技の知識や技能を適応したり、活かしたりすることができる。
- 柔道を継続しようとする態度を身に付けることができる。

3 単元計画

次	時	学習活動・内容	指導のねらい・手立て
一	1	1 柔道の特性を知り、活動計画や学習の進め方を知る。 (1) 学習の計画を知り、学習の準備を行う。 ・前年の復習 (特性・成り立ち・伝統的な考え方・柔道衣の扱い方・礼法) ・世界選手権の動画視聴 ・班編成（体格・体力を考慮して） ・学習の約束確認 ・学習計画 ・準備運動の内容確認 (2) 抑え技の簡単な試合を行い、課題の設定を行う。 ・取と受に分かれた約束練習(10 秒間)	自分や仲間の課題を設定することができるようにする。 ・柔道に必要な技能を知ることができるように VTR（短時間）を視聴する場を設定する。 ・学習の見通しを持つことができるように、学習計画を提示する。 ・安全に活動を行うことができるように、体格・体力が同じ程度になるように、班編成を行う。 ・課題を設定することができるように、試しの試合を行う活動を設定する。 抑え込みの条件 ・相手がだいたい仰向け ・相手の上になっている ・相手の足で、自分の脚や胴体を絡まれていない
	4	2 抑え技の学習を行う。 【課題を解決する活動】 (1) 取（かける方）と受（受ける方）に分かれた抑え技のかかり練習(反復練習)を行う。 抑え技のポイント ①相手の動きを制する ②バランスをとる ③隙間を作らない ・袈裟固め ・横四方固め (2) 取（かける方）と受（受ける方）に分かれた約束練習を行う。 ・約束練習(取は、抑えた状態から逃げる受を 10 秒間抑え続ける) 【振り返る活動】 (3) コレクトシートを見て振り返る。 ・要点を整理。 【発展課題に挑戦する活動】 (4) 抑え技の自由練習を行う。	袈裟固め、横四方固めの技能を身に付ける中で、抑え技のポイントについて理解し、それらを適応したり、活かしたりすることができるようにする。 ・抑え技のポイントを理解するために、コレクトシートやエンドレスモニターで確認する場を設定する。 ・正しい抑え技の形を身に付けることができるように、最初から仰向けの受に対して、抑え込みを繰り返すかかり練習(反復練習)を行う活動を設定する。 ・実戦に近い抑え技へのスモールステップとして、正しい形で抑え込んだ状態から、逃げようとする受の動きに対応して抑え込み続けるという条件の約束練習を行う活動を設定する。 【探求する思考】 ・学習の成果を認識し、技能習得のためのプロセスやポイントを確認するために、コレクトシートを見て振り返る活動を設定する。 【蓄積する思考】

		・膝立ちと仰向けで対峙 ・両者膝をついて対峙 (30 秒間)	・身に付けた抑え技のポイントを適応したり、活かしたりすることができるように、両者向かい合った状態から、抑え技の自由練習を行う活動を設定する。【発想を広げる思考】
二 (後)	5	3 投げ技の学習を行う。 【課題を解決する活動】 (1)受け身の練習を行う。 ・後ろ受け身 ・横受け身 ・前回り受け身 (2)取と受に分かれた投げ技のかかり練習、約束練習を行う。 ・大外刈り ・体落とし 崩しのポイント ①左手を引く ②右手を釣る ③体さばき 【振り返る活動】 (3)コレストシートを見て振り返る。 ・要点をまとめて整理する。 【発展課題に挑戦する活動】 (4)投げ技の約束練習を行う。 取と受に分かれ、大外刈り、体落としに技を限定した約束練習	大外刈り、体落としの技能を身に付ける中で、投げ技の崩しについて理解し、それらを適応したり、活かしたりすることができるようにする。 ・安全に投げ技を身に付けることができるように、受け身の練習を行う活動を設定する。 ・投げ技の崩しを理解するために、コレストシートやエンドレスモニターで確認する場を設定する。 ・投げ技の基本動作について理解することができるように、取と受に分かれた投げ技のかかり練習・約束練習を行う活動を設定する。その際、合理的に投げるためには受のバランスを崩す「崩し」が重要だということが分かるようにする。 【探求する思考】 ・学習の成果を認識し、技能習得のためのプロセスやポイントを確認するために、コレストシートを見て振り返る活動を設定する。【蓄積する思考】 ・身に付けた「崩し」を適応したり、活かしたりすることができるように、技を大外刈り、体落としに限定した約束練習を行う活動を設定する。【発想を広げる思考】
三	1	4 簡単な試合を行う。 (1)抑え技の団体戦を行う。(30 秒) (2)投げ技の団体戦を行う。(1 分間) (3)活動全体を振り返り、学習のまとめを行う。	柔道を継続しようとする態度を身に付けることができるようにする。 ・これからも柔道に関わろうとする態度を身に付けることができるように、抑え技や投げ技の団体戦を行う活動を設定する。 ・全体を振り返り、まとめを行うことができるように、感想を記入する活動を設定する。

4 授業の実際

(1) 第一次

【ねらい】 自分や仲間の課題を設定することができるようにする。

第一次では、まず、1年時の学習を振り返り、2年時の柔道の学習の見通しを持つことができるように、単元のオリエンテーションを行った。1年時の学習は主に抑え技と受け身を中心に行っており、生徒は1年ぶりの柔道の授業に、「投げてみたい。」「背負い投げができるようになりたい。」など、投げ技に興味を持って授業に臨む姿が多く見られた。

次に、試合の様相をイメージし、柔道に必要な技能を知ることができるように世界選手権のVTRを視聴した。生徒は、抑え技や投げ技で一本が決まった時の迫力に驚き「カッコいい。」「あんな技をやってみたい。」などの感想を持ち、学習への意欲を高めることができた。

そして、安全に活動を行うことができるように、体格・体力が同じくらいになるように、班編成を行った。

さらに、抑え技の課題を設定することができるように、「取」（抑える方）と「受」（抑えられる方）に分かれて、『取』が仰向けに寝ている『受』を抑え込み、逃れようとする『受』を 10 秒間抑え込み続ける」という抑え技の簡単な試合（約束練習）を行う活動を設定した。その際、生徒には抑え込みが成立する条件（相手がだいたい仰向けである・相手の上になっている・相手の足で自分の脚や胴体を絡まれていない）を示し、抑え込む形にはこだわらずに条件を満たして 10 秒間抑え込むように指示した。

【資料 28】のように前年度の学習を思い出しながら、それぞれ独自に工夫し、様々な形で抑え込みに取り組んだ。この活動において、31 人中 21 人（68%）の生徒が 10 秒間抑え込むことができた。活動後、成功した生徒にうまく抑え込むことができた理由について発問をしたところ、「力を入れたから」「逃げられないようにしたから」などと答える生徒が多く、うまく抑え込めた根拠や理由までは理解していない様子が見られた。

最後に、活動を振り返ってコレクトシートへの記述を行い、生徒は「完璧な抑え込みにするにはコツを身に付けなければならない」や「手と足をうまく使って抑え込むことが必要」などの課題を設定した。



【資料 28 抑え技の試しの試合の様子】

（２）第二次前半

【ねらい】 袈裟固め、横四方固めの技能を身に付ける中で、抑え技のポイントについて理解し、それらを適応したり、活かしたりすることができるようにする。

①「課題を解決する活動」

第二次前半では、まず、袈裟固めと横四方固めを身に付けることができるように「取」と「受」に分かれて反復練習を行う活動を設定した。その際、生徒が見本となる動きをいつでも確認することができるように、袈裟固め、横四方固めのモデルとなる映像を繰り返し再生するエンドレスモニター【資料 29】を使用した。生徒は、映像を確認して動きをイメージしながら【資料 30】のように繰り返し練習していた。



【資料 29 エンドレスモニター】

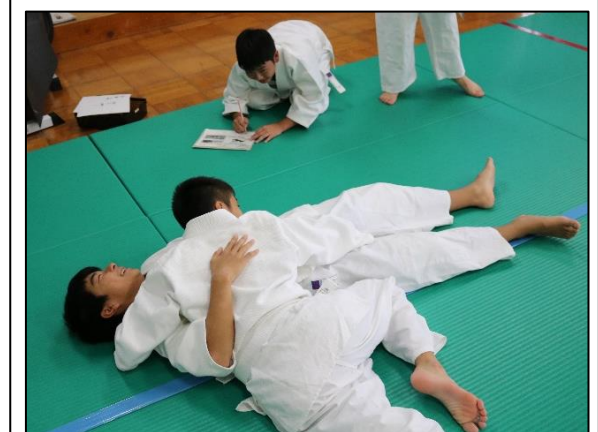


【資料 30 反復練習を行う様子】

次に、より実戦に近い袈裟固めと横四方固めを身に付けるために、第一次で行った試しの試合と同じように、『取』が仰向けに寝ている『受』を抑え込み、逃れようとする『受』を 10 秒間抑え込



【資料 31 抑え技の約束練習の様子】



【資料 32 抑え技の約束練習の様子】

み続ける」という条件の約束練習を行う活動を設定した。その際、抑え技のポイントに気が付くことができるように、「受」になった時の合理的な逃げ方（足を絡める、手を抜いてうつ伏せになる、帯を持ってブリッジ）を確認した。生徒は合理的に逃げる「受」を、逃がさないようにするためには、どうすればよいかを考えながら約束練習を行うことができた。その際【資料 31】、【資料 32】のように、班員同士で観察しながら、互いにアドバイスをすることで、「手をしっかり使う」や「すき間を空けない」「足を伸ばしてバランスをとる」など、抑え込むためのポイントを理解しながら袈裟固めと横四方固めを身に付けることができた【資料 33】。

このように、「課題を解決する活動」を通して、袈裟固め、横四方固めについて理解し、身に付けることができた。この時、生徒は「探求する思考」を働かせ、「抵抗する相手にバランスが取れない」など、うまくいかないことを改善しようと解決策を考えたり、「相手の動きに合わせて動く」など、より合理的な動きを身に付けようと試行錯誤したりして課題の解決に取り組むことができた。

「返さなければ」工夫したこと
手をしっかり使って、
服を丸む。
ちゃんと足を腰に付ける。

「にけられなければ」工夫したこと
すきまを空けない！
自分のあしをのばす
バランス

抑え込みのポイント
○相手の動きを制する。
○すき間を作らない。
○バランスをとる。

【資料 33 「課題を解決する活動」 コレクトシートの記述例】

②「振り返る活動」

抑え技の学習の成果や技能習得のためのプロセス、それぞれの技能のポイントを確認することができるように、コレクトシートを見て振り返り、要点をまとめて記述する活動を設定した。生徒は【資料 34】のように学習したことを振り返り、それぞれの考えを発表する活動を設定した【資料 35】。また、【資料 36】のように生徒の考えを板書で示し、学級全体で共有する場を設定した。そして【資料 37】のように、コレクトシートに整理することで、抑え技をうまく行うためには「相手の動きを制すること」、「バランスをとること」、「すき間を作らないこと」が必要だということ確認し、「袈裟固めや横四方固めができるようになった要因、コツやポイント」を再確認することができた。

さらに、身に付けたことをより深く実感するためにペアで観察しながら約束練習を行う活動を設定した。多くの生徒が抑え込みを決める中で【資料 38】のように、抑え込む上で効果的だったポイントを確認することができた。

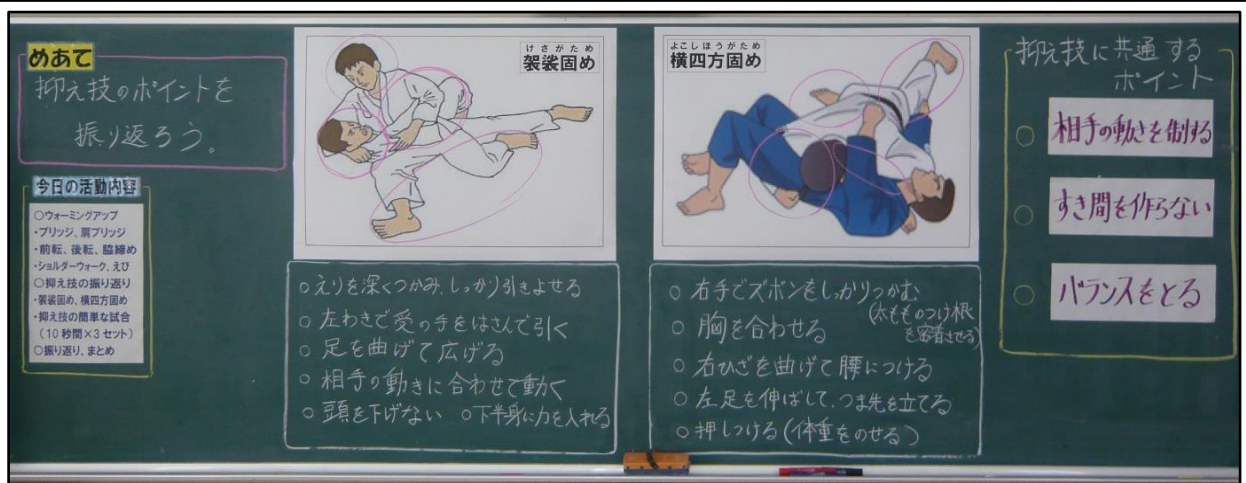
生徒はこのように、「振り返る活動」を通して、袈裟固め、横四方固めのような抑え技についての理解を深めることができた。この時、生徒は「蓄積する思考」を働かせ、抑え込みの 3 つのポイント



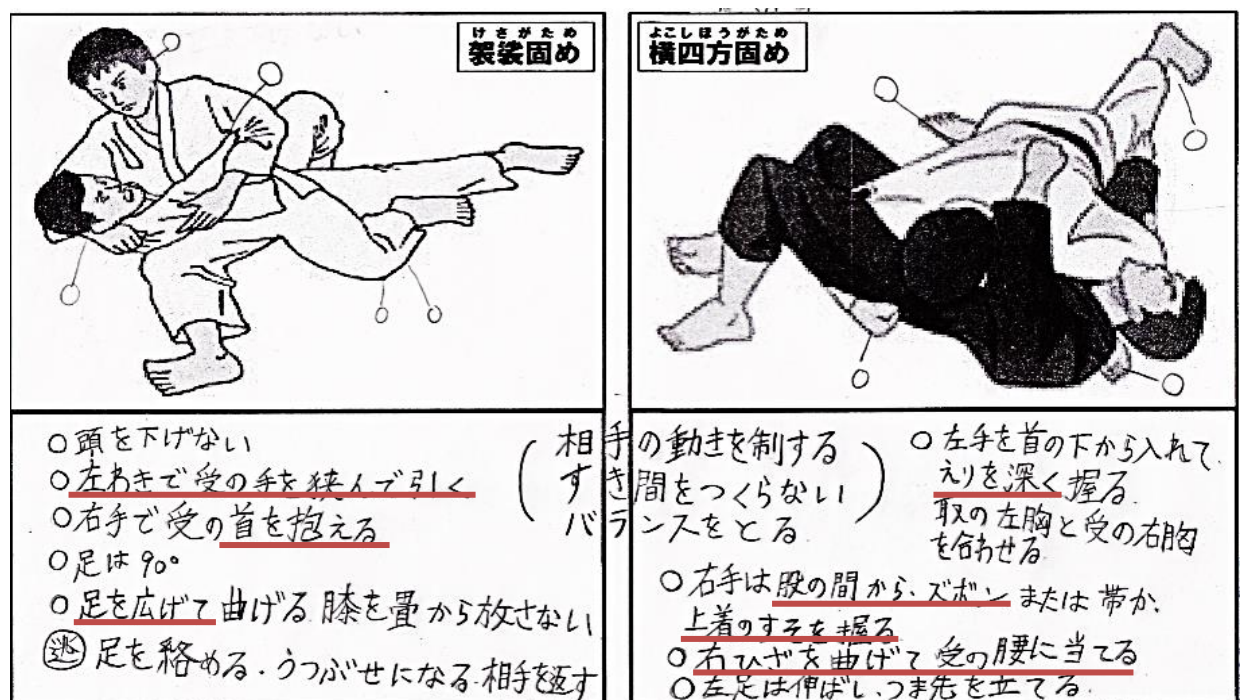
【資料 34 コレクトシートへの記述をしている様子】



【資料 35 意見を共有している様子】



【資料 36 「振り返る活動」で抑え技のポイントを共有化するための板書】



【資料 37 「振り返る活動」コレクトシートの記述例】

を実践することで、できるようになったことを振り返ったり、どうしてできるようになったのかを自覚したりして、学習してきた成果を振り返ることができた。

逃げられないために <u>えりやすそを</u> <u>いかり握っていた。</u>	<u>えりやすそをいかり握った。</u> <u>体重をもせた。</u>
---	--

【資料 38 約束練習のペア生徒の記述例】

③「発展課題に挑戦する活動」

身に付けた袈裟固め、横四方固めを適応したり、活かしたりすることができるように「お互いに攻防する中で相手を 10 秒間抑え込もう」という「発展課題に挑戦する活動」を設定した。生徒は、これまでに学習した抑え技のポイントを想起しながら、新たな課題の解決に向けて試行錯誤しながら課題に挑戦する姿が見られた【資料 39】。

また、様々な工夫やアイデアを共有するために、活動後は、「抑え込む上で工夫したこと」や「抑え込むことができなかった理由」を発表する活動を設定した【資料 40】。【資料 41】のように、「すき間を作らないようにした」や「首に手を回した」や「バランスをとった」など学習の成果を実感した発言が多く見られた。また、「足で足を抑えた」「相手の動きに合わせて動いた」や「待ち時間に対戦相手の動きを観察し、予測して動きを読んで抑え込む」など新たに工夫したことについての記述も多く見られた。また、【資料 42】のように、抑え込まれたが、「相手がしっかり手を引いていた」や「相手が首をしっかり抱えていた」など、抑え込まれた理由を理解している様子も見られた。さらに【資料 43】のように、抑え込めなかった生徒も「相手の動きを利用しようとした」や「相手に自分の動きを利用された」など工夫したことについて理解している記述も見られた。



【資料 39 発展課題に挑戦する様子】



【資料 40 発表と板書での振り返り】

勝ち	勝ち	勝ち
抑え込む上で、工夫したこと <u>すき間を</u> <u>作らずにいかに</u> <u>つめた。</u> <u>いかり首にまき</u> <u>回して。</u>	抑え込む上で、工夫したこと <u>足を足でおさめた。</u> <u>動けなくした</u> <u>(横四方固め)</u> <u>バランスをとって</u> <u>はやく抑えた。</u>	抑え込む上で、工夫したこと <u>相手の首を</u> <u>けんきうして</u> <u>最上アでつち</u> <u>くち、わがわ</u> <u>逆をひいて</u> <u>おさえた。</u>

【資料 41 抑え込んだ生徒の記述例】

負け	負け
どうして逃げるこ うできなかったか <u>手が抜けなかつ</u> <u>た。</u> 相手のよかった所はど こだったか <u>がしりともたれ</u> <u>た。</u>	どうして逃げるこ うできなかったか <u>動けなかつた。</u> 相手のよかった所はど こだったか <u>右手受の首をいかり</u> <u>か</u> <u>えていた。</u>

【資料 42 抑え込まれた生徒の記述例】

引き分け	引き分け
どうして抑え込むこ うできなかったか <u>相手のバランスが</u> <u>崩れなかつた。</u> やろうとしたが、できな かつたこと <u>相手の向かってくる</u> <u>てに不意をうけて</u> <u>横に倒すことが</u> <u>できなかった。</u>	どうして抑え込むこ うできなかったか <u>先に倒された。</u> <u>自分が倒れるまで</u> <u>手前に引いた時に</u> <u>倒された。</u> やろうとしたが、できな かつたこと <u>相手を倒す。</u>

【資料 43 抑え込めなかった生徒の記述例】

生徒はこのように、「発展課題に挑戦する活動」を通して、身に付けた袈裟固めと横四方固めの知識や技能を当てはめて使ったり、工夫して使ったりすることができた。この時、生徒は「発想を広げる思考」を働かせ、動く相手をどうしたら抑え込めるのかを考えたり、技の形が崩れても、学習したポイントを使おうとしたりして、新たな課題に挑戦にすることができた。

最後に、投げ技の課題を設定することができるように、授業後の次時の予告で投げ技の練習を行うことを告げ、教師と模範生徒によるデモンストレーションを行った【資料 44】。授業前から生徒の投げ技に対する関心は高かったが、さらに意欲を高めることができた。生徒は、「一本取るためには、手の動きが必要だ」や「投げるためには足をかけるタイミングを身に付ける必要がある」などという投げ技の課題を設定することができた。



【資料 44 投げ技デモンストレーション】

(3) 第二次後半

【ねらい】大外刈り、体落としの技能を身に付ける中で、投げ技の崩しについて理解し、それらを適応したり、活かしたりすることができるようにする。

①「課題を解決する活動」

第二次後半では、まず、安全に投げ技の練習を行うことができるように受け身の練習を行う活動を設定した。第 1 学年時にやってきたことを復習しながら、繰り返し反復練習を行い、生徒は、投げ技の練習を行うためには、投げられた時に身を守るために受け身が必要なことを理解して、正しい受け身の仕方を身に付けようと何度も練習する姿が見られた。

次に、大外刈りと体落としを身に付けることができるように、「取」と「受」に分かれてかかり練習、約束練習を繰り返し行う活動を設定した。その際、安全に練習を行うために、投げられたときは横受け身を行うこと、投げたときや投げられたときの「命綱」として「取」は左手を離さない、「受」は右手を離さないことを徹底させた。また、見本となる動きをいつでも確認することができるように、【資料 45】のようにエンドレスモニターを流し続けた。生徒は、映像を確認して動きをイメージしながら練習する姿が見られた。



【資料 45 エンドレスモニター】

さらに、「崩し」の重要性を理解することができるように、大外刈り、体落としのモデルとなる映像をエンドレスモニターで確認し、教師による模範を行った。生徒は大外刈りの学習場面で、「だから、足を奥に踏み込むのか。」などと、納得する生徒の発言が印象的であった。このように、相手の重心を移動させるためには、手の動きや、足の踏み込みが必要だということを理解した上で、班でペア観察をしながら「崩し」を意識して練習を繰り返し、互いにアドバイスをすることで、崩しについて理解しながら大外刈りと体落としを身に付けることができた【資料 46～49】。このように、「課題を解決する活動」を通して、大外刈り、体落としについて理解し、身に付けることができた。この時、生徒は「探求する思考」を働かせ、「うまく左手を引くことができない」など、うまくいかないこと

を明らかにし、改善しようと解決策を考えたり、「狙った方向に相手を崩す」など、より正確な動きを身に付けようと試行錯誤したりして課題の解決に取り組むことができた。



【資料 46 かかり練習の様子 大外刈り】



【資料 47 かかり練習の様子 体落とし】



【資料 48 約束練習の様子 大外刈り】



【資料 49 約束練習の様子 体落とし】

②「振り返る活動」

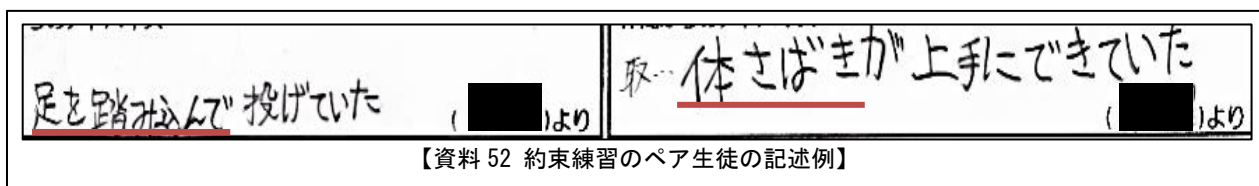
投げ技の学習の成果や技能習得のためのプロセス、それぞれの技能のポイントを確認することができるように、コレクトシートを見て振り返り、要点をまとめて記述する活動を設定した。生徒は学

大外刈り	体落とし
受の重心 右後ろすみ 真後ろ 左後ろすみ 右横 左横 右前すみ 真ん前 左前すみ 崩しの方向は？ 相手の重心を意識してやたら やりやすかった。 <u>左手は自分の胸の前に引く</u> <u>右手は釣る</u> <u>左足を奥へふみにむ</u>	受の重心 右後ろすみ 真後ろ 左後ろすみ 右横 左横 右前すみ 真ん前 左前すみ 崩しの方向は？ 相手を回すように投げた やりやすい。 <u>えりをあげて腕をひっぱた瞬間</u> <u>倒した瞬間</u> <u>左手は時計をみる</u>

【資料 50 「振り返る活動」 コレクトシートの記述】



【資料 51 「振り返る活動」で投げ技のポイントを共有化するための板書】



【資料 52 約束練習のペア生徒の記述例】

習したことを振り返りながら【資料 50】のように、コレクトシートに、投げ技を決めるために必要な崩しを行うためには、「左手の引き」、「右手の釣り」、「体さばき」が必要だということを整理し、【資料 51】のように全体で共有することで、「なぜ、うまく大外刈りができるようになったのか」や「なぜ、うまく体落としができるようになったのか」を再確認することができた。

さらに、身に付けたことをより深く実感するためにペアで観察しながら約束練習を行う活動を設定した。多くの生徒が投げ技を決める中で、「受」を崩して投げるために効果的だったポイントを確認することができた【資料 52】。

生徒は、このように、「振り返る活動」を通して、投げ技をうまく決めるための崩しについての理解を深めることができた。この時、生徒は「蓄積する思考」を働かせ、「手首を返して時計を見るように左手を引いたら、受が右前すみに崩れるようになった」など、できるようになったことを振り返ったり、「なかなか相手を崩すことができず、うまく大外刈りが決まらなかったが、足を深く踏み込む体さばきをしたから、崩せるようになって、大外刈りが決まるようになった」などというような、どうしてできるようになったのかを自覚したりして、学習してきた成果を振り返ることができた。

③「発展課題に挑戦する活動」

身に付けた大外刈り、体落としを適応したり、活かしたりすることができるように「防御する相手に、大外刈り、体落としを決めよう」という「発展課題に挑戦する活動」を設定した。その際、安全に活動できるように、投げたり、投げられたりしたときには「命綱」を離さないことを再確認した。生徒はこれまで学習した投げ技のポイントを想起しながら、動く相手の動きに合わせて、押したり、引いたりしてバランスを崩そうとしたり、大外刈りや体落としをかけようとしていたりして試行錯誤し、新たな課題の解決に向けて取り組む姿が見られた【資料 53】。

そして、様々な工夫やアイデアを共有するため

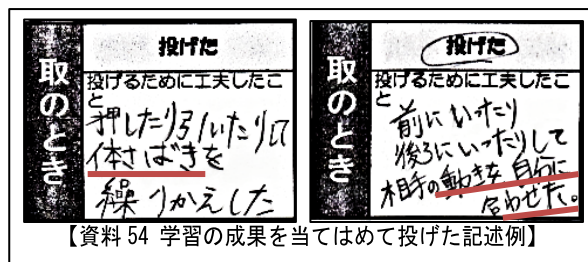


【資料 53 発展課題に挑戦する様子】

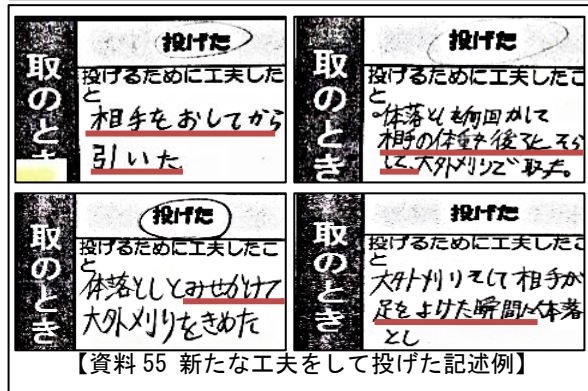
に、授業後は、発表を行う活動を設定した。生徒の発表やコレクトシートの記述には【資料 54】のように、「押したり、引いたり、体さばきをくりかえした」や「前後の動きで、相手の動きに合わせた」など、これまで学習してきた、「左手や右手の動き」や「体さばき」を当てはめようとした生徒の発言や記述が見られた。また、【資料 55】のように、「相手を押してから引いた」や「体落としをかけて、相手の重心を後ろに意識させ、大外刈りをかける」、「体落としと見せかけて大外刈り」、「大外刈りをかけて、相手がよけたところを体落とし」など相手の動きや反動、体重移動を利用する姿が見られた。さらに、【資料 56】のように、投げることはできなかったが、「相手の手の動きができていた」「体さばきができていなかった」など、投げ技のポイントを理解している記述が見られた。

そして、「相手の崩しの逆に体重を持って行った」など投げ技で学んだことを、防御の場面で活かして使っている姿も見られた【資料 57】。

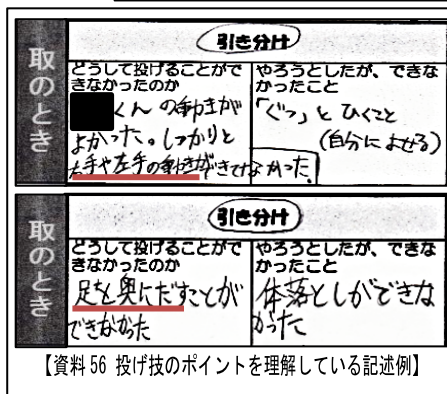
生徒はこのように、「発展課題に挑戦する活動」を通して、身に付けた大外刈りと体落としの知識や技能を当てはめて使ったり、工夫して使ったりすることができた。この時、生徒は「発想を広げる思考」を働かせ、防御する相手をどうしたらうまく投げることができるのかを考えたり、相手のバランスを崩して相手の動きや反動を利用しようとして、新たな課題に挑戦することができた。



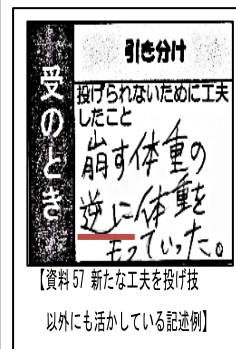
【資料 54 学習の成果を当てはめて投げた記述例】



【資料 55 新たな工夫をして投げた記述例】



【資料 56 投げ技のポイントを理解している記述例】



【資料 57 新たな工夫を投げ技以外にも活かしている記述例】

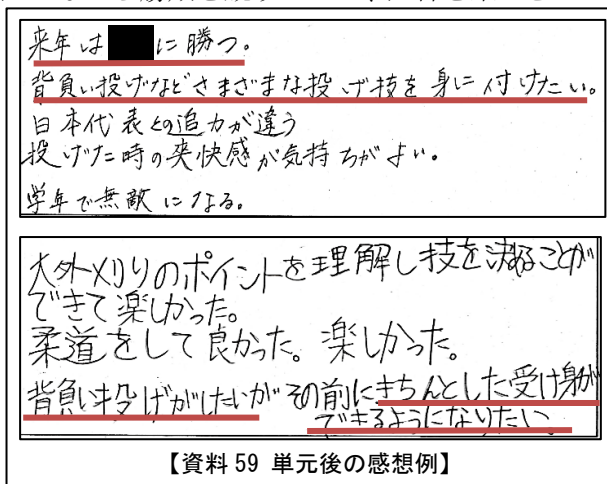
(4) 第三次

【ねらい】柔道を継続しようとする態度を身に付けることができるようにする。

第三次では、まず、学習の成果を発揮できるように、抑え技の試合と投げ技の試合を団体戦で班対抗で行う活動を設定した。生徒は、身に付けた技を試しながら勝敗を競うことで、試合を楽しむこと



【資料 58 抑え技の試合の様子】



【資料 59 単元後の感想例】

ができた【資料 58】。試合の際は、自分たちで審判やタイマーなどの分担を行い、自主的に取り組むことができた。特に抑え技、投げ技が決まった時は大いに喜び、仲間と成果を分かち合う姿がとても印象的であった。

最後に、柔道の学習全体を振り返ることができるように、感想を書く活動を設定した。生徒は【資料 59】のように、学習の成果を自覚し「柔道は楽しかった」や「柔道が好きになった」という感想に加え、「もっとうまくなりたい」や「またやりたい」といった感想も多く見る事ができた。

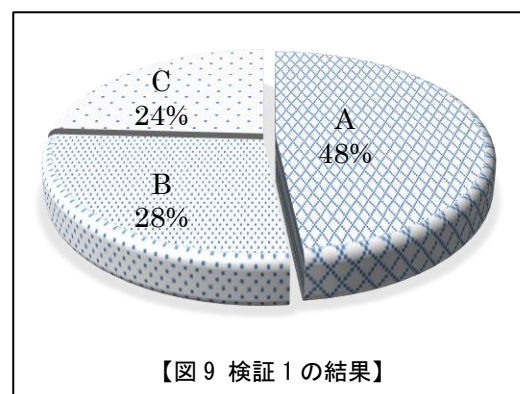
5 結果と考察

(1) 検証1 「柔道の抑え技(袈裟固め、横四方固め)及び、投げ技(大外刈り、体落とし)の行い方を理解することに有効であったか」について

第二次に実施した「振り返る活動」の、「技能のポイント」について、【表 9】のように、生徒のコレクトシートの記述内容から【表 10】のように「A：袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としの四つの項目について、全ての項目で「技能ポイント」を三つ以上書き出している。」「B：袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としの四つの項目について、三つの項目で「技能ポイント」を三つ以上書き出している。」という基準で判断した【25 頁資料 37、28 頁 50 参照】。

【表 9 判断の手掛かりとなる「技能ポイント」キーワード】	
項目	判断の手掛かりとなる「技能ポイント」キーワード
袈裟固め	・首を抱える ・足を広げる ・相手の手を引いて脇を締める
横四方固め	・襟を深く握る ・下ばきを深く握る ・右膝を曲げて相手の腰に付ける
大外刈り	・左手を右胸の前に引く ・右手を曲げて釣る ・左足を深く踏み込む ・右後ろすみ
体落とし	・左手の腕時計を見るように引く ・右手を曲げて釣る ・左足後ろ回りさばき ・右前すみ

【表 10 柔道の行い方を理解することに有効であったかの判断基準】	
A	袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としについて「技能ポイント」を三つ以上書き出している項目が四つある。
B	袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としについて「技能ポイント」を三つ以上書き出している項目が三つある。
C	A、B 以外

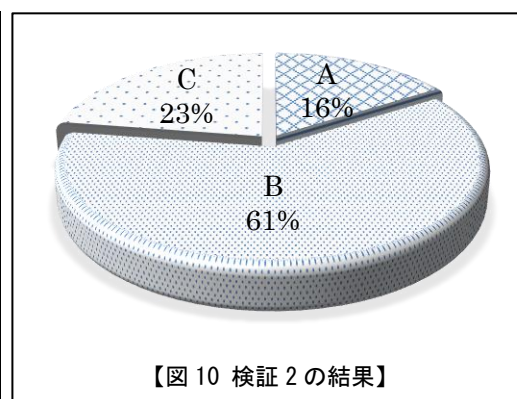


その結果、【図 9】のような検証結果になり、A、B 合わせて 76%であった。このことから課題を設定し、解決に向けて、かかり練習や約束練習を繰り返し行い、改善点を考えたり、意見を共有したりしたことは柔道の行い方を理解することに概ね有効だったと考える。このような結果になったのは次の三点が考えられる。一つ目はそれぞれの「技能ポイント」をキーワード化して繰り返し、何度も確認したこと。二つ目は授業の振り返りで、発表する活動を設定したことで意見の全体共有を図れたこと。三つ目は、コレクトシートにまとめて振り返りを行ったことで、知識が蓄積されたことである。しかし C の生徒も 24%という割合を示したことは今後の課題である。ポイントとして意識しなければならないことが多すぎて理解できていないことが考えられる。優先順位を明らかにし、要点を絞って身に付けさせる手だてを工夫する必要がある。

(2) **検証2**「柔道の技能を高めることに有効であったか」について

柔道の技能の高まりを【表 11】のような基準で判断した。「振り返る活動」と「発展課題に挑戦する活動」の約束練習、自由練習において「技を決めることができたか」という判断基準に、ペア観察という視点を加え、より客観的な判断となるような基準とした【26 頁資料 38、27 頁 52 参照】。

【表 11 柔道の技能を高めることに有効であったかの判断基準】			
		「振り返る活動」	「発展課題に挑戦する活動」
A	技	抑え技、投げ技ともに決めることができています。	左に同じ
	ペア観察	それぞれの技の【表 9】のポイントを満たしている記述がある。	
B	技	抑え技、投げ技ともに決めることができています。	
	ペア観察	それぞれの技の【表 9】のポイントを満たしている記述がある。	
C	A、B 以外		

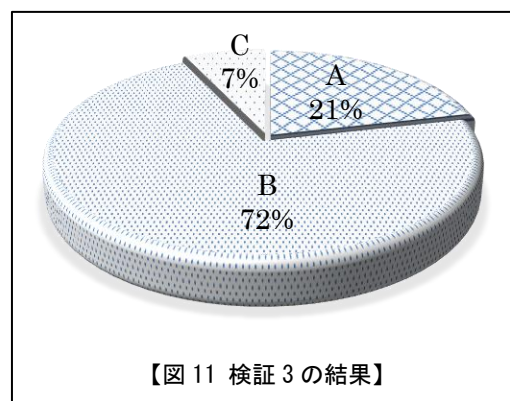


その結果、【図 10】のような検証結果になり、A、B 合わせて 77%であった。このことから課題を設定し、解決に向けて、かかり練習や約束練習を繰り返し行い、改善点を考えたり、意見を共有したりしたことは柔道の技能を高めることに概ね有効だったと考える。しかし、A 判断の生徒が 16%と少なく、C の生徒が 23%という割合を示したことは今後の課題である。このような結果になった原因は二点考えられる。一つ目は、発展課題の性質が「容易に解決できないもの」であるため、発展課題に挑戦するために必要な技能の習熟程度に多少のずれがあったこと。二つ目は、技能ポイントを理解しているが、約束練習でうまく実行できるまで技能が高まっていなかったことである。発展課題を「容易に解決できないもの」としつつ、生徒に実態に合ったバランスの良いものに設定すること、そのために必要な技能を精選し、確実に身に付ける手立てを工夫する必要がある。

(3) **検証3**「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったか」について

検証授業 I より柔道においては、技能を適応したり、活かしたりすることができたかどうかを、発展課題において抑え込むことができたこと、投げ技を決めることができたことを前提として、第二次後半に実施した「発展課題に挑戦する活動」の、「技能のポイント」について、【表 12】のように、生徒のコレクトシートの記述内容から「A：発展課題を達成し、かつ適応した技能のポイントを自身のシートに書き出している。」「B：発展課題を達成したが、適応した技能のポイントを自身のシートに書き出していない。しかし、ペア生徒から、適応しようとしていた技能のポイントについて記述がある。または、発展課題を達成できなかったが、適応させようとした技能のポイントを自身のシートに書き出している、もしくはペアの生徒の技能ポイントを書き出すことができています。」という基準で判断した【26 頁資料 41～43、30 頁 54～57 参照】。

【表 12 身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったかの判断基準】	
A	発展課題を達成し、かつ適応した技能のポイント又は工夫したことを自身のシートに書き出している。
B	発展課題を達成したが、適応した技能のポイント、又は工夫したことを自身のシートに書き出せていない。しかし、ペアの生徒から、適応しようとしていた技能のポイントについて記述がある。 または、発展課題を達成できなかったが、適応させようとした技能のポイント、又は工夫しようとしたことを自身のシートに書き出している、もしくはペアの生徒の技能ポイントを書き出すことができています。
C	A、B 以外

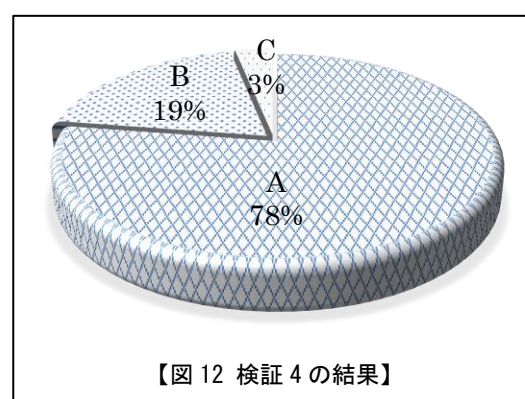


その結果、【図 11】のような検証結果になり、A、B 合わせて 93%と高い数値が得られた。このことから、今まで学習した袈裟固めや横四方固め、大外刈りや体落としのポイントやコツを使って、「お互いに攻防する中で相手を 10 秒間抑え込もう」や「防御する相手に、大外刈りや体落としを決めよう」という、発展課題に試行錯誤しながら挑戦したことは、新たな状況で、抑え込むため、投げするための工夫を生み出すことにつながり、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに非常に有効に働いたと考える。このような結果になったのは、これまでの学習で「お互いに攻防する中で相手を 10 秒間抑え込もう」や「防御する相手に、大外刈りや体落としを決めよう」という発展課題に対する様々な解決策の選択肢をたくさん蓄積することができていたからだと考えられる。

(4) 検証 4 「柔道を継続しようとする態度を身に付けることに有効であったか」について

単元終了時に実施したアンケートにおける、今後の柔道の関わりに関する記述を分析し、【表 13】のように、生徒の記述内容を「A：柔道に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている、かつ、今後の取り組みについての具体的な記述がある。」「B：柔道に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている記述がある。」という基準で判断した【30 頁資料 59 参照】。

【表 13 柔道を継続しようとする態度を身に付けることに有効であったかの判断基準】	
A	柔道に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている、かつ、今後の取り組みについての具体的な記述がある。
B	柔道に取り組む姿勢について、積極的に機会を求めようとしている記述がある。
C	A、B 以外



その結果、【図 12】のような検証結果となり、A、B 合わせて 97%と非常に高い数値が得られた。また、事後アンケートの結果から、「今後もチャンスがあれば、柔道を練習したいか」という質問に対して、3.4(4 段階の自己評価尺度法の学級平均値)という結果が得られた。

このことから、柔道の袈裟固め、横四方固め、大外刈り、体落としなどの技能を試行錯誤しながら身に付けようと探求し、振り返って深く理解しながら蓄積し、発展課題に挑戦することで発想を広げ、学んだ全てを発揮するために団体戦を行ったことは、生徒のこれからも柔道を継続しようとする態度を身に付けることに非常に有効であったと考える。

6 成果と課題

(1) 検証授業Ⅱの成果

①「課題を解決する活動」、「振り返る活動」について

抑え技や投げ技を身に付ける活動において、技能のポイントを蓄積したコレクトシートを見て再確認し、練習に取り組んだことで、生徒はそれぞれのポイントを意識しながら、かつ仲間と教え合いながら練習を行ったので、身に付け方やコツを理解し、つまづきに対する修正方法を身に付けるなど、行い方を理解することに非常に有効に働いた。

②「発展課題に挑戦する活動」について

抑え技や投げ技の知識や技能を使って、発展課題「お互いに攻防する中で相手を 10 秒間抑え込もう」や「防御する相手に、大外刈り、体落としを決めよう」に挑戦したことが、「相手の動きを利用する」や「相手の動きに合わせる」などを新たに考えたり、試合をイメージして相手の動きを観察し、予測するなどの工夫や発見につながり、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることにつながった。

③ 発展課題について

「発展課題に挑戦する活動」で、袈裟固めや横四方固めで学んだ「相手の動きを制する」「バランスをとる」「隙間を空けない」などのポイントをとっさに考え、別な状況でも使うことができるようにし、「発想を広げる思考」を働かせることができたことは、自ら考えて課題に挑戦しようとする生徒の意欲を引き出し、抑え技や投げ技の技能を高めることができた。

④ 発展課題の頻度について

検証授業Ⅰでは、一つの発展課題、検証授業Ⅱでは二つの発展課題を設定した。可能な限りたくさんの場面で発展課題を設定することが、生徒の意欲や思考を引き出し、技能を高めることにつながった。

(2) 検証授業Ⅱの課題

① 発展課題の設定場面について

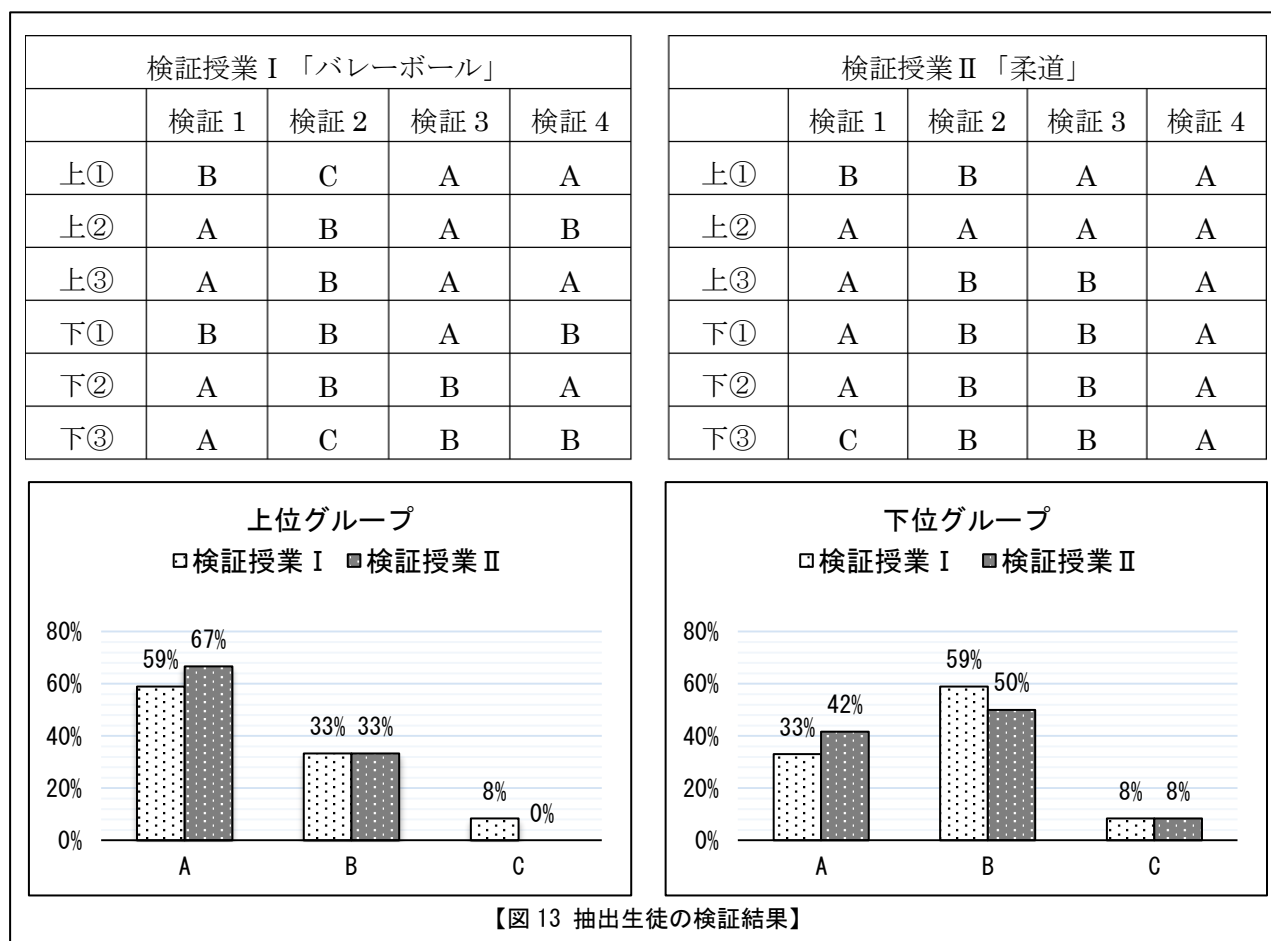
検証授業Ⅰの課題を踏まえ、検証 3 の技能を適応したり、活かしたりできたかどうかを、投げ技、抑え技ともに簡単な試合の勝敗を手掛かりに検証したが、対人競技であったため、学習した抑え技や投げ技の知識や技能を、意図的に適応したり、活かしたりすることがあまりできなかったようである。柔道においては、技能のどこに焦点を当てて発展課題を設定するか見極めていく必要がある。今後は、勝敗だけではなく、技の有効性を見取ることができるような、検証の方法を考えることが必要であると感じた。

VII 全体考察

1 検証授業Ⅰ「バレーボール」と検証授業Ⅱ「柔道」の結果の分析

(1) 抽出グループの結果と考察

事前アンケートの調査結果、体力テストの結果、検証授業Ⅰ「バレーボール」でのスキルテストの結果及び授業での様子をもとに実践学級における抽出生徒を検討した。本研究と関わりが深いと考えられる「意欲」と「運動技能」の面において、下位層と上位層の抽出グループへの効果を見取るため、上位グループ3名、下位グループ3名の生徒の選出を行った。その結果、【図13】のような検証結果となった。



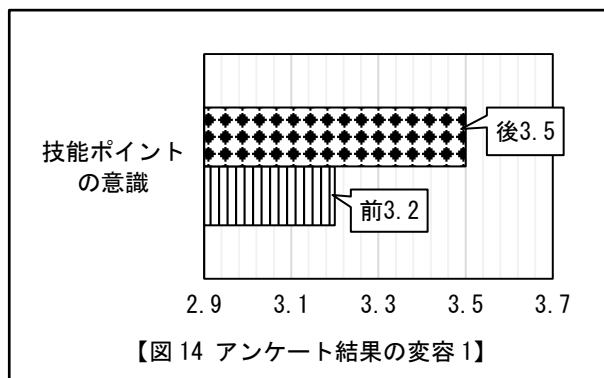
上位グループに関しては、検証授業Ⅰ、ⅡともにA、B合わせて90%を超えており、Cの割合はわずかであり、Bの割合は検証授業ⅠからⅡにかけての数値の変化は見られなかった。また、下位グループに関しては、検証授業Ⅰ、ⅡともにA、B合わせて90%以上となり、ⅠからⅡにかけて、Aの割合が増加している。これらのことから、下位層、上位層の生徒どちらに対しても、手立ては有効に働いたと考える。特に、運動に苦手意識を持ち、意欲も低下した下位層の生徒にとっては、課題達成を目指して思考を働かせたことによって、運動が無意味なものではなく、意欲を持って挑戦できるものとなり「知識」や「技能」を高めることにつながったと考える。

(2) 学級全体の結果と考察

① 検証1「運動の行い方を理解することに有効であったか」

バレーボールでは、A、B合わせて84%【図5】、柔道ではA、B合わせて76%【図9】であった。また、事前、事後アンケート結果の変容から、【図14】のように、「運動をするとき、技能のポイントを意識しているか」という質問に対しては3.2から3.5へと向上が見られた。このことから課題を

設定し、解決に向けて教え合い、振り返りながら繰り返し練習を行い、改善点を考えたり、意見を共有したりしたことは、運動の行い方を理解することに概ね有効であったと考える。このような結果になったのは次の三点が考えられる。一つ目は、それぞれの「技能ポイント」をキーワード化して繰り返し、何度も確認したこと。二つ目は、授業の振り返りで、発表する活動を設定したことで意見の全体への共有化を図れたこと。三つ目は、コレクトシートに整理して再確認を行ったことで、知識が蓄積されたことである。

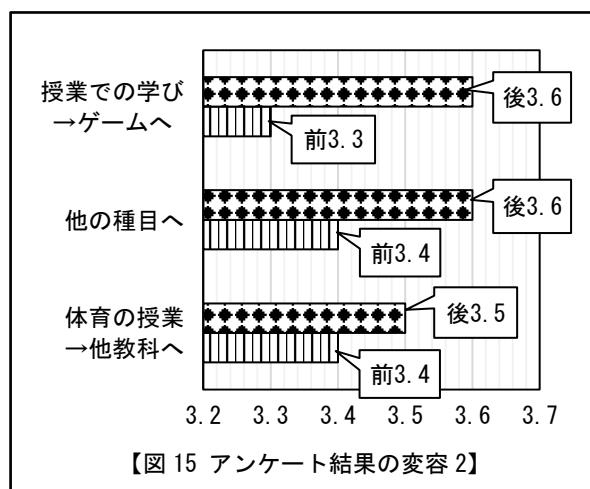


② 検証2 「運動技能を高めることに有効であったか」

バレーボール、柔道ともに、A、B 合わせて 77%【図 6】、【図 10】であった。このことから課題を設定し、解決に向けて改善点を考えたり、意見を共有したりしながら繰り返し練習を行ったことは、概ね有効に働いたと考える。しかし、バレーボール、柔道ともに C の生徒も 2 割以上という数値を示したことは、今後の課題である。このような結果になった理由として考えられるのは、バレーボールでは、単元前より運動技能が高い生徒の伸びがいまひとつであったこと。柔道では、技能ポイントの働きに加え筋力等の体力も影響したことが考えられる。今後は身に付けさせるべき技能の最低ラインを保証しつつ、習熟段階に応じて高い技能に挑戦する場を設けることや、新津中学校の生徒の課題でもあった、体力の総合的な向上を目指し、さらなる手立てを考え、取り組んでいく必要があると感じた。

③ 検証3 「身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに有効であったか」

バレーボールでは、A、B 合わせて 97%【図 7】、柔道では A、B 合わせて 93%【図 11】とともに非常に高い数値が得られた。また、事前、事後アンケート結果の変容から、【図 15】のように、「授業中に練習したことを、ゲーム（試合）で当てはめて使ったり、活かして使ったりしているか」という質問に対しては 3.3 から 3.6 へ、「ある種目の授業で学んだことは、他の種目の授業にも活かせると思うか」という質問に対しては 3.4 から 3.6 へ、「体育の授業で学んだことは、他教科の役に立つと思うか」という質問に対しては 3.4 から 3.5 へとそれぞれに向上が見られた。このことから、試行錯誤しながら挑戦する「発展課題に挑戦する活動」を設定したことは、

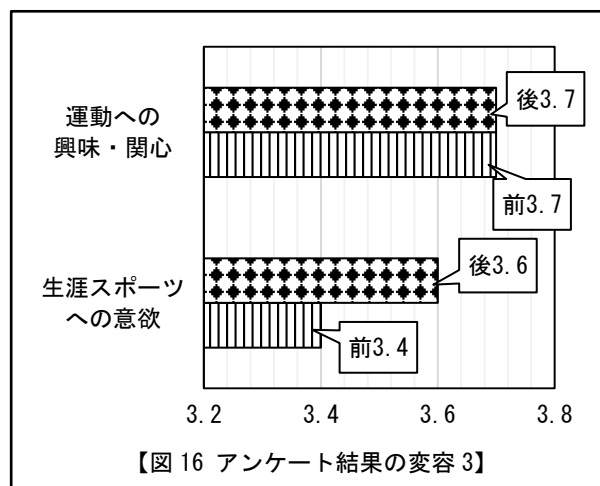


は、今まで学習した知識や技能を組み合わせたり、新たな状況で当てはめて使ったり、工夫したりすることができたので、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高めることに非常に有効に働いたと考える。このような結果になったのは次の二点が考えられる。一つ目は、設定した発展課題が生徒の意欲を引き出し、意欲的に挑戦できるものだったこと。二つ目は、それまでの学習で、発展課題に対する様々な解決策の選択肢をたくさん蓄積することができていたことである。

④ 検証4「運動を継続しようとする態度を身に付けることに有効であったか」

バレーボール、柔道ともに、A、B 合わせて 97%

【図 8】、【図 12】と非常に高い数値が得られた。また、事前、事後アンケート結果の変容から、【図 16】のように、「運動・スポーツや体育の授業への興味・関心」は 3.7、「将来、社会人になっても、趣味で続けたいと思う運動やスポーツがあるか」という質問に対しては 3.4 から 3.6 へと向上が見られた。このことから、運動に必要な技能を試行錯誤しながら身に付けようと探求し、振り返って深く理解しながら蓄積し、発展課題に挑戦することで発想を広げ、学んだ全てを発揮する活動を行ったことは、生徒の運動を継続しようとする態度を身に付けることに非常に有効であったと考える。



⑤「学習の転移を促す思考フローを導く学習過程は、運動に対する深い学びに向かう生徒を育てることに有効であったか」

①～④の結果を総合的に判断し、学習の転移を促す思考フローを導く学習過程は、運動に対する深い学びに向かう生徒を育てることに有効であったと考える。

探求して学んだことを振り返って蓄積し、新たな課題に挑戦して、学んだことを適応したり、活かしたりすることで発想を広げ、運動に対する意欲が高まった。このようなプロセスを様々な単元、領域で繰り返すことで転移が促され、知識や技能はさらに関連付けられ、思考の流れがより豊かなものになり、主体的に学習に向かう態度へとつながると考える。

2 研究のまとめ

(1) 成果

①「振り返る活動」について

教え合ったり、改善策を考えたりしながら繰り返し練習して、「振り返る活動」において、コレクトシートを用いて、解決して身に付けた学習の要点を再確認したことで、1人1人に知識や技能のいわゆる「引き出し」を多く作ることにつながり、運動の行い方を理解し、運動技能を高めることができた。

②「発展課題に挑戦する活動」について

「発展課題に挑戦する活動」において、これまで身に付けた知識や技能を使って、発展課題に試行錯誤しながら挑戦する活動を設定したことで、「発想を広げる思考」を働かせ、身に付けたことを適応したり、活かしたりする能力を高め、自力で解決することができ、自信や有能感を高めることにつながった。

③ 発展課題について

意図的に設定した発展課題に挑戦することで、身に付けたことを使って、類似の状況に当てはめること、異なる状況に工夫して使うこと、発展課題を達成することができずとも、試行錯誤すること、このような思考を働かせる活動を設定したことが生徒の挑戦意欲を引き出し、意欲や技能を高めることに有効であった。

④ 学習の転移を促す思考フローについて

「探求する思考」、「蓄積する思考」、「発想を広げる思考」という学習の転移を促す思考フローを位置付けた学習の流れは、新たな課題に対し「使える」感を味わわせることができ、単元内だけでなく、他の単元にも転移する可能性を見出すことができた。

(2) 課題

① 発展課題の追究の必要性

本研究はバレーボールで一つの発展課題、柔道で二つの発展課題を設定したことが生徒の学びの深まりに有効に働いた。このような発展課題を、さらに多くの場面で適切に設定していく必要がある。そのための活動の内容、及び活動の順序や組み合わせを追究していく必要がある。

引用・参考文献

- ・文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 東山書房
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 保健体育編』
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 総則編』
- ・文部科学省(2010)『学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動』 東洋館出版社
- ・文部科学省(2013)『学校体育実技指導資料第2集 柔道指導の手引』 東洋館出版社
- ・福岡県(2014)『福岡県スポーツ推進計画』
- ・福岡県体育研究所(2013)『「体育的学力」を育む授業づくり』
- ・福岡県体育研究所(2014)『平成 25 年度 長期派遣研修員研修報告書』
- ・福岡県体育研究所(2015)『平成 26 年度 長期派遣研修員研修報告書』
- ・福岡県体育研究所(2016)『平成 27 年度 長期派遣研修員研修報告書』
- ・福岡県体育研究所(2017)『平成 28 年度 長期派遣研修員研修報告書』
- ・福岡大会実行委員会(2010)『第 49 回全国学校体育研究大会 福岡大会 研究紀要』
- ・福岡教育大学(2014)『平成 26 年度 研究紀要 第 17 号 福岡教育大学・三付属中学校』
- ・松本 昌一(2012)『福岡教育大学付属小倉中学校 長期派遣研修員研 修報告書 平成 23 年度保健体育科』
- ・リチャード・A・シュミット(1994)『運動学習とパフォーマンス』 大修館書店
- ・佐伯 年詩雄(2018)『中学校体育実技 福岡県版』 学研
- ・杉原 隆(2003)『運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近』 大修館書店
- ・岡出 美則(2013)『ビジュアル新しい体育実技』 東京書籍
- ・福原 祐三,鈴木 理(2005)『みんなが主役になれるバレーボールの授業づくり』 大修館書店
- ・福原 祐三,勝本 真,黒後 洋,鈴木 理(1997)『バレーボールの練習プログラム』 大修館書店
- ・本村 清人,坂田 敬一,鮫島 元成,磯村 元信(2003)『新しい柔道の授業づくり』 大修館書店
- ・高橋 健夫(1994)『体育の授業を作る』 大修館書店
- ・高橋 健夫(2003)『体育の授業を観察評価する 授業のためのオーセンティック・アセスメント』 明和出版
- ・北尾 倫彦,佐藤 豊,森 良一(2012)『観点別学習状況の評価規準と判定基準[中学校保健体育]』 図書文化社
- ・(2017)『平成 29 年版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 体育・保健体育』 明治図書
- ・石井 英真(2017)『中教審「答申」を読み解く』 日本標準
- ・(2017.8)『教育と医学』 慶應義塾大学出版会
- ・田村 学(2015)『授業を磨く』 東洋館出版社
- ・田中 博史(2014)『子どもが変わる接し方』 東洋館出版社
- ・寺尾 慎一(1994)『授業づくりの基礎・基本 ー教師の意識改革を求めてー』 北大路書房
- ・市川 伸一(2008)『「教えて考えさせる授業」を作る』 図書文化社
- ・秋田 喜代美(2010)『授業研究と学習過程』 日本放送出版協会
- ・山崎 英則,片上 宗二(2003)『教育用語辞典』 ミネルヴァ書房
- ・上杉 賢士(2012)『「ルールの教育」を問い直す 子どもの規範意識をどう育てるか』 金子書房
- ・広田 照幸(2004)『思考のフロンティア 教育』 岩波書店
- ・外山 滋比古(2012)『思考の整理学』 だいわ文庫
- ・堀 洋道,山本 眞理子(2001)『心理測定尺度集 I 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』 サイエンス社
- ・神野 元基(2017)『人工知能時代を生き抜く子どもの育て方』 ディスカバー・トゥエンティワン
- ・ジャン・ガブリエル・ガナシア(2017)『そろそろ人工知能の真実を話そう』 早川書房
- ・竹内 一正(2012)『ジョブズの哲学 カリスマが最後に残した 40 の教え』 だいわ文庫